

URP 先端的都市研究シリーズ 23

都市を生きるその後の人生
ターニングポイントとしての治療共同体

山北 輝裕・掛川 直之 編

先端的都市研究ブックレットシリーズの刊行に寄せて

本シリーズは、大阪市立大学都市研究プラザを拠点として取り組まれてきた先端的都市研究の成果や、それを踏まえた教育実践の成果を、多くの人々に共有していただくことを目的として刊行するものである。

都市研究プラザは、大阪市立大学が創設以来蓄積してきた「都市研究」の実績をもとに、2006年4月に開設された。「プラザ」という名称を付したのは、研究者だけではなく、都市において様々なまちづくりの実践に取り組む人々もそこに集い、相互に刺激を与え合い、新たなアイデアを産み出すことができるような「広場」としての役割を果たしていきたいと考えてのことであった。

その後、2007年度には、文部科学省が、我が国の大学の教育研究機能の一層の充実・強化を図り、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、もって、国際競争力ある大学づくりを推進することを目的として創設した、グローバル COE プログラムの拠点のひとつに選ばれた。そして、2007年度から2011年度までの5年間、文部科学省の財政的支援の下に、「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」をテーマとする研究拠点形成推進事業に取り組んだ。その成果を受け継いでさらに、2014年度には、文部科学大臣より「共同利用・共同研究拠点」としての認定を受けた。現在は、この認定を踏まえて、「先端的都市研究拠点」という名称を掲げ、全国の関連研究者のコミュニティが都市研究プラザを拠点として、大阪市立大学がこれまで蓄積してきた都市研究の知的リソースや人的・組織的ネットワークを活用し、最先端の都市研究に取り組んでいただけるよう、そのための基盤整備に努めているところである。

その一方で、研究者とまちづくりの実践に取り組む人々がともに集うことができる「広場」でありたいという都市研究プラザ創設の理念もまた、この間一貫して維持されてきた。この理念に基づく研究者とまちづくりの実践者との協働は、大阪市立大学のキャンパスにおいてのみならず、「現場プラザ」と名付けられたサテライト施設においても多彩に展開され、様々な成果を挙げている。また、ソウル、台北、香港、バンコク、ジョクジャカルタ等の海外の諸都市に設

立した海外センターや海外オフィスを拠点として、それらの諸都市を基盤として活動する研究者やNPO等との協働にも取り組んでいる。

社会に開かれた「広場」において、まちづくりの実践から学び、その成果をまちづくりの実践へと還元していくような研究を継続していくことこそが、大阪市立大学都市研究プラザが目指すところである。本シリーズの刊行も、そうした目的を実現するための取り組みのひとつである。本シリーズが、大阪のみならず全国各地において、まちづくりの実践に活かしていただけたならば、これに優る喜びはない。

大阪市立大学都市研究プラザ所長

阿部 昌樹

はじめに

Aさんが亡くなるちょうど1ヶ月ほど前の2020年4月2日。わたしの携帯電話にAさんからの着信がありました。久しぶりのAさんからの着信でした。留守番電話には伝言が吹き込まれないままに切られていました。

そのときは気がつかずに、何かあったのかな、と数時間とかからずに折り返すも不在で、「ただいま電話に出られません。ご用件をお知らせください。」というショートメッセージが返ってくるのみでした。

着信はつけておいたし、用事があればまたかかってくるだろうと、わたしは、そう深くは考えずに、そのままにしてしまっていました。その電話が単なる間違いだったのか、それとも、何か伝えたいことがあったのか、今となってはわかりません（Aさん、あの電話はいったい何だったんですか？）。

それから1ヶ月と少し経ったあとの話です。畏友たるささしまサポートセンター事務局次長の橋本恵一さんからFacebookのメッセージでAさんの訃報を知らされたわたしは言葉を失いました。お亡くなりになられてから10日ほど経った後でした。

橋本さん：あと別件ですが、Aさんが亡くなったと先週伝え聞いて、この間何人か（から聞きました。ちょっとねー、判明する時期が唐突で受け止める時間がかかりそうですね。

掛川：ええ……

橋本さん：今日●●さん（著者注：当時、島根社会復帰促進センターでAさんを担当されていた社会福祉士さんで、現在は岡崎医療刑務所の福祉専門官）と話したら、●●さんも知ってたんですよ。

掛川：4月のはじめにAさんから着信があつて、かけ直したら出なくて……。いつ亡くなったんですか？

橋本さん：その後の取材で5月3日だそうです。息子さんが喪主で仕切って

いたようです。

(2020年5月12日メッセージャーより)

思い返してみると、2015年3月のおわりころに、指導教員であった全泓奎先生に「名古屋のささしま共生会というところで出所者支援をはじめようとしている橋本さんというソーシャルワーカーがいるから一緒に行こう」と、何もわからないまま名古屋に連れて行っていただき、わたしの名古屋でのフィールドワークははじまりました。わたしとAさんとの出会いも、この5年前に遡ります。

受刑経験のあるかたの生活史を聴きとるといふ、今ではわたしのライフワークのひとつになっているインタビュー。この2人目だか3人目だかにご協力いただいたのがこのAさんでした。

Aさんからお話をうかがったのは、記録によれば、2015年5月8日となっています。1時間半から2時間くらいが相場のインタビューに、Aさんは3時間半以上語り続けてくださいました。このときに、件の手記も直接見せていただいたと記憶しています。

橋本さん：そうそう。4センチくらいの手記をもらっていて、まだ見れてないけど、もう少し浸る準備したいなー

掛川：なんだかな.....

橋本さん：高さ4センチ。

掛川：いってましたね

橋本さん：すごい書き物してるんですね。時間あるから

(2020年5月12日メッセージャーより／一部改)

わたしがこの研究プロジェクトを立ち上げようと思いついたのは、この悲しい知らせを耳にした翌日でした。「橋本さんのお役に立ちたい」何より「他の出所者が社会に戻ったときの役に立ちたい」というAさんの思いをかたちにしたい。生前からお話はうかがってはいたのですが、なかなか一步を踏み出せず、お亡くなりになられてからというのは遅きに失するような気もしまし

たが、Aさんの思いをかたちにしたいという気持ちが沸き上がってきました。

掛川：なんか助成金とってかたちにしていくのもありかもですね

橋本さん：なんとなくかけそうなイメージありますか？

掛川：『都市に生きる——刑務所出所者の人生（仮題）』みたいな。Aさんは手記から、あと2人くらいタイプの違う人のインタビューさせてもらって。刑務所出所者のライフコースと出所後の生活再建に関する質的研究みたいなイメージ。山北さん研究代表なってくれんかなあ。全部いま思いついたことなので中身ないですけど。笑

橋本さん：すげえな。参与観察でおなじみ山北さん！ できなくはないような.....

(2020年5月13日メッセージより)

Aさんの大切な手記や、手付かずだったインタビュー時のAさんの語りをわたし一人がまとめるということには正直不安がありました。そこで、一番に頭に思い浮かんだのが質的研究のスペシャリストで、わたしが日ごろからその研究のファンだった山北さんでした。研究会で一緒にさせていただいたり、アメリカへの調査旅行へも一緒にさせていただいたりはしていたものの、電話などかけたこともないあこがれの先輩に、突然、電話をして、不躰な願いをしたわけです。

このブックレットは、刑務所という刑罰の執行施設における、このTCというプログラムが、出所後、都市生活を送る「出所者」たちの人生にどのような影響を与えるのか、ということについての接近を試みるものです。AさんとCさんという2人のTCの1期生の広い意味での語りを中心に、それぞれの人生のなかにおける犯罪行為に至る背景と、その犯罪行為を手離すきっかけとなっているであろうTCとについて検討していくきっかけになればと考えています。

なお、本研究は、日本大学文理学部研究倫理委員会の審査を得ておこなっています（承認番号02-35）。また、適宜、個人が特定されないよう、事例の

本質を損なわない範囲で一部加工をしていることを付言しておきたいと思います。

2021年1月21日

掛川 直之

目 次

はじめに

第1章	出会いが支える治療共同体	掛川 直之	1
第2章	「許し」への覚悟	山北 輝裕	7
第3章	変われるかもしれないという期待	掛川 直之	31
第4章	都市を生きる者たちからの手紙 橋本恵一・有田朗・雷蔵・次元		57

あとがき

第1章

出会いが支える治療共同体

掛川 直之

1 治療共同体とは？

まずは、本ブックレットにおいて、くり返し触れられている TC (Therapeutic Community) ——治療共同体¹——という概念について、最初に確認しておく必要があるかと思います。

A さんが服役した刑務所は、いわゆる PF I 方式がとられており、わたしたちが聞きなれた「刑務所」という名称とは違う「社会復帰促進センター」という名が与えられていたのです。

現在、日本に4ヶ所ある社会復帰促進センターのなかで、島根あさひ社会復帰促進センターでは、試験的に、TC と呼ばれる回復プログラムが導入されていました²。この回復プログラムは、獄中で訓練生と呼ばれる受刑者が輪になって、自らが犯した罪や幼少期の辛い体験について真剣に語りあい、お互いの言葉を尊重して耳を傾けあい、対話を重ねながら自分自身の苦い過去と向きあおうするなかで、生き直しが試みられます。未だ、全国的な拡がりはみせてはいないわけですが、これまでの日本の矯正教育とは一線を画すこのとりくみは、A さんをはじめ訓練生といわれる受刑者の人たちの生き方そのものを変えていっているようにも思われます。

¹ 個人的には、「回復共同体」という訳語のほうがぴったりくるのではないかと考えていますが、本ブックレットでは、ひとまず、定訳となっている「治療共同体」という訳語を用いることにします。

² このあたりのより詳細な経緯等についても次の章で山北さんがまとめてくださっていますので、そちらをご参照ください。

この島根あさひ社会復帰促進センターのなかで、2009年から、TCを実戦する中核にいらっしゃったのが、大阪大学教授の藤岡淳子先生でした。藤岡先生は、法務省矯正局、府中刑務所分類審議室首席矯正処遇官、宇都宮少年鑑別所鑑別部門首席専門官、多摩少年院教育調査官など矯正の現場を経験されたのちに研究者に転身された司法・犯罪心理学の第一人者であり、カリスマ性あふれるお人柄と切れ味鋭い論理展開は、わたしを含めて多くのファンがいるほどです³。

藤岡先生は、『治療共同体実践ガイド』（金剛出版、2019）という編著のなかで、この治療共同体を、①「共同体」を意図的につくり、それを個人のライフスタイルとアイデンティティの変化を促進するための方法とすること、②個人の情緒的癒しと健全な生活に向けた行動や態度および価値を身につけさせるのが目的であること、そして、個人が癒され、変化・成長するために共同体を活用すること、と整理されています。

また、藤岡先生のお弟子さんで、藤岡先生とともに島根あさひ社会復帰促進センターにおいてTCの運営に奮闘され、現在は同志社大学准教授の毛利真弓先生は、この藤岡先生の編著のなかで、世界と日本におけるTCの展開について整理されています。毛利先生によれば、日本におけるTCは、概念の統一がおこなわれないままに実践が進んでいるといわれ、「集団で話し合いをして治療的な雰囲気になればそれを『TC』と呼ぶような傾向もできた」ように感じると記されており、今後の概念整理の必要性を指摘されています。要するに、TCには未だ確定的な定義がなされていないということになります。ですが、そうはいつでも、このブックレットでTCという概念をはじめて知ったというかたには、いささかイメージしにくいかもしれません。そこで、TCについて、毛利先生の渾身の一節を少し長いですが引用しておきたいと思います。

³ 余談ですが、藤岡先生の妻は、一定の迫力がありながらも、他者の話を聴いていらっしやるときの絶妙な相槌にあると個人的には思っています。その相槌にあわせて、多くを語る訳ではなくても適切な一言を言ってくださる。相手に「きちんと話を聴いてもらっている」と感じさせる天才だと思います。

良いものは、どこで使っても誰に使っても良い。すべての人は、成長し、学ぶために、自らがいかなる人間なのかを考え、どうなりたいかを模索する社会／共同体と、それを支えてくれる関係を必要とする。何らかの理由でその過程につまずき失敗した人なら、なおさらである。TC の実践は膨大で、端的にまとめられる理念は明示できないが、「専門家が人を救ったり治療したりするのではなく、回復や成長、そして変化は、立場を超えた『人と人との誠実な出会い』の場で起きる」ということが、TC の神髄と言えるのではないだろうか。

(毛利真弓「治療共同体の理念と歴史」藤岡淳子編著『治療共同体実践ガイド』金剛出版、2019 より)

治療共同体の研究で学位を取得された毛利先生の TC にかかる思いと、やさしいまなざしとが端的に示された一節であると思います。なかでも、犯罪行為を手離すためには、立場を超えた「人と人との誠実な出会い」が不可欠である、と考えるところには全面的に同意するところです。

2 訓練生からみた治療共同体

A さんのことをより深く知るために、2020 年 12 月 27 日に、TC1 期生の C さんと TC3 期生で、グループは別ながらも A さんとも交流のあった D さんにもくわわっていただいたの座談会を開催しました（以下、「2020 年 12 月 27 日座談会」と記します）。この座談会のなかで、TC について以下のような語りがありました。

D さん:あの辺のメンバーがちよっとやばいかなあっていうのがオレ...

C さん:そうですね。なんせそのなんて言うん(?)空気入れたがる人とかが多いから

掛川:空気? 空気入れたがるってどういうことですか?

D さん:これ特別な、中の業界用語って言ったらいいの? 「要らぬことを吹き込む」と言う

掛川:へー!

D さん:そういうのを「空気を入れる」っていう言い方をするんです

掛川:なんか素敵なことみたいに聞こえますね(笑)

D さん:で、こう思いを膨らませるって意味ですよ

掛川:へー!

D さん:それに染めちゃうみたい。それで落とすんですよ

掛川:「落とす」っていうのは懲罰にってことですか?

D さん:そうそう。

掛川:うおー、足の引っ張り合い(笑)

D さん:そうです

橋本さん:駆け引きみたいな

掛川:こわっ

D さん:もう仮出所とか仮免とか言うんですけど、そういうのが来るとそういうのやりたがるやつ多いんですよ

掛川:あー、仮釈放にさせてたまるかと。お前だけ早よ出ようことなんて

D さん:でもそれができないのがTC っていう場所なんですよ

掛川:あー、それはどうしてなんですか?

D さん:こないだもちらっと話したんですけど、グループで何かやってる時でも、余暇の時間でも何でもいいんですけど、ちょっとケンカっぽくなるじゃないですか。そうなると、そこでもし手でもあげようもんなら、警務官が10人ぐらいドーンといっぺんに来て、捕らわれた宇宙人みたいにバーっとどっかへさらわれちゃうんですよ(笑)それであの1週間ぐらい帰ってこないんですけど、ふつうはそこで懲罰に行ったら他の場所に移されちゃうんですね。だけどTC っていう場所はそこがちょっと違ってて、戻されるんです

橋本さん:なるほどね

D さん:で、戻された上でどうするのかっていうと、その原因をどういふことなのか、ってみんなで作るんです

橋本さん:それはそれで辛いですよね

D さん:そう。それがRJ (著者注:関係修復的司法) なんですけど

掛川: 民主的といえは民主的だし、公開処刑と言われれば公開処刑なんですね

D さん: そう。それをみんなでやるもんだから「あん時オレはこういう気持ちで、こうだったんだ」で、相手は「オレはこういう風にしてた時だったんだ。それもこういう気持ちでいる時だったんだ。それでこうなったんで、ちょっと頭にきてしまった」で、こっちはちょっと楽しみたいだけで何かしてたんだと、言うその違いがわかるわけですよ。もろこれがRJ なんです。それを周りが見ている観衆として「じゃあその時自分だったらこうするよね」「いやそれはオレはこういう考えもあるよ」って言うようなことをいろいろ言い合うんですね。それで、みんなで見かけ合うことがRJ の発端ですから、要は原因追求とかそういうのじゃなくて、「そういうプロセスでそうなんだよね」って言うお互いの気持ちをわかり合う。要するに修復的ですよ。そういうものをしていく。それでまた一緒にやっていくっていうのがTC の一番いいところなんです

掛川: なるほど。まあある意味で連帯責任をガツと追及する場でもある

D さん: そういうことですね

掛川: ね。連帯責任が課される場だからこそ、逆に言うとうまく話し合えるってことなんですね

橋本さん: 向き合わざるを得ないっていう感じなんですね

掛川: なるほどね

D さん: そうなんです。それも1つの自分の犯した罪に向き合う方法でもあるという

訓練生にとってTCは、同じような境遇におかれたほかの訓練生（やさまざまな専門職）との出会いのなかで、自分と、そして自分の犯した罪と向き合い、再文脈化していく契機になっていたようです。こうしたことは、犯罪行為を主体的に手離すためにも不可欠なことだと考えられます。通常の刑務所では、「自分で考える、自分で決める」ということを徹底的に否定されるわけですが、TCでは「考える」ということが重視されるわけです。また、島根あさひ社会復帰

促進センターでは、TC 以外の工場に配役されている訓練生も、その日一日のおわりにその日をふりかえるミーティングがおこなわれるとのことで、訓練生にとってTCはこのミーティングに一日中本格的にとりくむという印象であったということでした。さらに、通常の刑務所ではできてしまいがちな、早く入ってきた者が上に立つといったヒエラルキーのようなものが否定される仕組みになっていたこともTCでは大きかったとDさんは教えていただきました。

第2章

「許し」への覚悟

山北 輝裕

Aさんへの手紙

Aさん。はじめまして。私は普段、家を失いホームレス状態になった方たちや、そうした方を支援する方たちにお話を聞かせてもらって、両者の関係性について考えたりしている者です。

もう亡くなられたAさんに、しかも一度もお会いしたこともない私が、Aさんについて書く、そしてこのような手紙⁴を書くというのも、Aさんのみならず、Aさんのご友人やご家族などから、お叱りを受けるのではないかと、大変恐縮しています。

でも、じつは今回、このような手紙を書かせてもらうことになった経緯は、1本の電話から始まりました。

いまこの手紙は、2020年の暮れに書いています。Aさんが2020年のその

⁴ 手紙形式は三浦耕吉郎さんの『エッジを歩く--手紙による差別論』（2017年、晃洋書房）を参考にしています。三浦さんは、インタビューをして「こんな話を聞きました」「こんなデータが得られました」といった調査内容の報告書に終わらせるのではなく、お話を聞かせてもらった方との対話によって「私という人間が、なにを思い、なにに驚き、なにを感じ、なにを考えたか」ということを伝えるうえでの文体を模索されました。語り手にむけてのみならず、研究者集団を越えたより多くの人たちへむけて書くという多重的な目的にかなう文体として手紙という形式が選択されています。本章も三浦さんの手紙形式に多くを負いながら、あるときには（私が代行するかたちになります）Aさんが読者に語りかけるように、そしてあるときには私がAさんに語りかけるような形式で、Aさんが伝えたかったであろうこと、そして私が考えたことを対話させていきたいと思います。

後の世界をご覧になったなら驚かれるかもしれません。新型コロナウイルスが蔓延し、日本では政府が外出の自粛を要請する緊急事態宣言を発令しました。その宣言が一旦解除された頃、私のもとに、このブックレットの編者の掛川さんから電話がかかってきたのです。

当時は、緊張感のある日々が続いていましたので、私は突然の電話に驚いたのですが、掛川さんは共同研究の相談をもちかけてきました。その内容は、Aさんが島根あさひ社会復帰促進センターに収容されていた頃にかかれていた手記をまとめたい、というものでした。

私は依頼をお受けしたものの、しばらくは新型コロナウイルスによって変わってしまった日常生活にふりまわされていました。

大混乱だった大学の前期の授業もなんとか終わり、9月にさしかかる頃、掛川さんの知己で、Aさんの身元引受人でもある、特定非営利法人ささしまサポートセンターの事務局長の橋本さんも交えて、いちど掛川さんと私の3人で計画について話しましょう、ということになりました。もちろん感染を防止するために、オンライン上で（Aさん。本当に世界は変わってしまいました）。

Aさんは、橋本さんに全幅の信頼を寄せていらっしゃいましたね。Aさんが手記を橋本さんに託されたことからそれは伺えました。そしてAさんが、なんども「橋本さんのお役に立ちたい」とおっしゃっていたこと、また何より「他の出所者が社会に戻ったときの役に立ちたい」とおっしゃっていたこと、そして釈放後の地域生活の道半ばでAさんがご病気で亡くなられてしまったこと。こうしたAさんの思いを汲み取りながら、掛川さんと橋本さんは、Aさんの手記をまとめたいとお考えになり、私も少しばかりそのお手伝いをさせてもらうという流れになりました⁵。

⁵ Aさんは、「そうやって皆さんが研究されてる『材料』の一つとしてね、片隅でもいいから、『こんなやつもおって、こうやって更生したぞ』って言われるのもね、ボクもやっぱ励みになってくるし。別に堂々と、ボクはどこの場に行っても、『こういう犯罪起こしました』、今言ったようにね、『でもこういう支えがあったり、こういうことがあって、だから頑張ってください』とか、『頑張れました』とか、

とはいえ、私は刑務所に収容されていた方の手記を読むのは初めての経験でした。日常の業務もあって、A さんの手記をなかなか開くことができない日々が続きました。簡単に引き受けたものの、亡くなった方の手記を読むのは気が重く、二の足を踏んでいたのも正直なところです。

でもようやく決意して、ノートに書かれた A さんの手記を開いてみると、そこにはびっしりと獄中の日々が枠線いっぱい記録されていることに大変驚いたのを覚えています。

獄中および出所後 1 年ほどまでつけられた、A さんの思いが詰め込まれた手記を読ませていただいて、ぜひとも私が今回 A さんにおたずねしたかったこと。そして私が考えたこと。それは「許し」についてです。

というのも、A さんは収容中に、内縁の B さんに手紙を頻繁に出されていましたが、手記の中でも、B さんへの思いと A さんの悔恨があふれた文章を記されていたからです。

A さんは誰に・どうやって許してもらおうとしていたんだろうか。A さんは許してもらったと思えたんだろうか。そもそも「許し」についてどのように考えていたんだろうか。

いまとなってはたずねるすべはないのですが、A さんは出所されてからもずっと、焦っていらしたんじゃないでしょうか。

いってもまた今受刑してる 7 万～8 万の人たちには、1 日も早くね、こういう風になって、こういう方法もあるから、心配せずにきちっと務めて、きちっと教育を受けて、出てきて社会に役に立てる人になってほしいなというのが願いであるし」と語られていました。なお橋本さんのアドバイスもあって、A さんのご友人や、場合によっては A さんのご家族にもお話を聞かせてもらいながら、A さんの人生を振り返りたいと計画をたてました。しかし、新型コロナウイルスの影響とブックレットの刊行期限の制約もあり、今回の研究期間で私が同席できたのは、オンライン上のものを含めて、A さんのご友人お 2 人へのインタビューのみでした (2020 年、10 月 30 日、12 月 27 日)。また引用させていただく A さんの語りは、掛川さんと橋本さんによって 2015 年 5 月 8 日に行われたものであることを断っておきます。

生い立ち、犯行

身元引受人の橋本さんによると、出所された 60 代の頃の A さんの第一印象は「貧相なおじさんって言ったら失礼かもしれないですけど、体の線の細い人で、よくしゃべるなっていう印象はありましたね」（掛川 2020:149）とされています。

A さんは昭和 22 年に長男として生まれました。中学時代は運動部に入っ、て、高校はスポーツ推薦を受けて入学するほど活発な青年だったようです。大学を卒業して、親戚が経営していた会社で勤めていました。当時は羽振りもよく、甘えて好き放題。車ものりまわしていたそうです。しかし親族の会社ということで、かえって居づらくなり、1 年ほどで仕事をやめられました。

当時の日本は、ボーリングが流行っていたそうです。そして A さんはひょんなことからボーリング場のマネージャーになりました。A さんが学生の頃、ボーリングに打ち込んでいたことも背景にあったそうです。その頃、結婚もして、子供も 2 人と順風満帆だったようです。

数年勤めたボーリング場は、ブームが去って経営難から閉店となりました。その後、A さんはイベント会社を立ち上げることとなりますが、A さんによると「それがそもそも失敗のもとだった」そうです。A さんは東京や大阪を行き来するうちに「家庭を放りっぱなし」にしたことから、子供が小さなときに離婚されています。

最初の頃はイベントの仕事もあったそうですが、バブルがはじけたことで備品などを買い取ったり、芸能関係の番組構成も時代とともに変化し、A さんの得意とする企画を通すことが難しくなっていたそうです。そのイベント会社を経営していた頃、B さんと内縁関係になり、以降 30 年近く同棲していたといひます。

なんとかイベントの仕事をつないでいたところ、A さんは不運なトラブルに巻き込まれます。ある企画で、A さんがイベント費用の 500 万円を請求したところ、契約者から 250 万円の未払いにあってしまいます。A さんは事業が滞ってしまい、金融に頼ることになります。

知人に借金を重ねながら必死にやりくりをしたものの、結局 A さんは不渡りを繰り返して、借金も数千万円に膨れ上がりました。A さんは自己破産をして、B さんとも別れることになりました。

別れてから 3 ヶ月たって、A さんは鬱になったそうですが、たまたま知人から飲食店で働かないかと誘ってもらい、アルバイトとして働きだします。そして、懸命に働いて得た収入のうち、20 万円を必ず B さんに送金していたそうです。また A さんは掛け持ちで早朝の仕事に就いていました。

そうした中、また A さんにイベントの仕事が無い込み、それに手を出してまったことで借金をつくってしまいます。

今更どっかで借りれることもできんからってことで、話が来てもガーンと追い詰められちゃって、ヤクザ送り込むぞとかなんだかんだなってきた、これだったらまた女房に迷惑かかるから、なんとかならんかってことでもう 3 日ぐらいからほんとに自分が自分じゃなかったんでね。パニック状態になっちゃって、事件を起こしちゃった。気がついた時には、あっ、こんなことしちゃったって言う形だったんですね。

B さんにも借金の事を言えず、激しい取り立てにあう中で、A さんはパニックに陥ってしまい、事件を起こしてしまいました。

犯行の当日、空き地に車を 40 分ほど停車させ、本当にやるのか迷っていたといいます。A さんはイライラしながらタバコを吸い、大量のタバコの吸い殻を捨てっぱなしにして、とうとう犯行におよびます。

その当時にちょうど●●なんかで、「火をつけるぞ」って言ったらその後すぐ金出したと、いうテレビでニュースやってたから、「火つけるぞ」って言って言えば金出すんだな、その当時はもう変な言い方したらそういう頭しかなかったんです。もう自分じゃなかったんですね。ほんとに。でそうやって言えば簡単に出すなど。ボクが昔、色んな●●の山奥の方向行った時に、郵便局が、山の中にぽつんとある郵便局を襲ったわけです。だけど今言うように「火つけるぞ」って言って、灯油ちょっとこのぐら

い持って行って、灯油ちよろちよろと匂いますよね。撒いて火つけるぞって言ったら結局非常ベル鳴らされたんです。非常ベル鳴らして、ボクとしてみては刑事さんは、「お前郵便局におったのは2分ちょっとぐらいしかおらんぞ」、だけど警報がビーッと鳴ってすぐ警察来るからどうのこうの。ボクもはじめての経験だから、これはまずいやって思って逃げちゃったんです。

結局、Aさんはお金を奪うことはできないままに、逃げてしまいました。でも、40分近く車内にいた姿は近隣住民に目撃されていました。そしてAさんは後日、再びとある店舗で強盗を企てます。

●●行きや5万、6万あるだろうとまたバカな考え方で、●●行ってそれも未遂だったんですけど、●●で店員さんが飛びかかってきたんです。ボクを捕まえようと。ボクが刃渡り15センチの包丁と、ペットボトルに残った灯油パッとまいて、「金出せ」って言ったら、店員さんがレジにいないで、店舗で商品の詰め替えしてたところだったもので、その時にちょうど振り返って、「ちょっと待ってちょっと待って」って言ったもので、レジへ行くのかなとボクは思ったら、「ちょっと待ってちょっと待って」って言いながら、ボクもこんな華奢で..相手すごいおっきかったんです、下見も何もしてないから、巨大なでかい人だったもので、「出せ」って言ったら、「ちょっと待ってくれちょっと待ってくれ。オレのポケットから金出すから」、って言って財布に手出したら金出してくれるなとボク思ったんです。そしたらそれをバンとぶつけられて。今度飛びかかってきたんです。飛びかかってボクも後退りして、ここにドアがあるところに自動ドアの寸前の開く寸前のところでバンッとぶつかってこられてボク倒れたんです。倒れた時にその人も一緒に倒れてきたときに持ってたナイフがお腹に刺さったんです。

結果的に、Aさんは店員さんに全治1ヶ月の怪我を負わせてしまいます。2回目の強盗でもAさんは金を奪うことはできないまま逃走しました。

Aさんは事件を起こして3年半後に逮捕されました。事情聴取にやってきた刑事に、Aさんはすぐに自供したといます。

似た人間がいるから聞きたいし、ちょっとアレだからってみえたわけです。もうその時に観念したんです。こんな事件を抱えながら、いろいろな人を顔見ながらしとくのもアレだから。女房と別れてるし色んなことを考えてたけれども、ここできちんと一線引こうと。自分でこんな生活してもアレだからってことで、もう車の中で自供したんです。

刑事はずっと尾行していたようで、Aさんを逮捕した後で、「お前事件を起こしてからほんとに真面目な、ちゃんとやってたな。向こうの（飲食店の）社長もそう言ってたからな。でもやったことはやったことだから」と言ったといます。その時の親身になって接してくれた刑事をAさんは「むっちゃいい刑事さん」と振り返っていました。判決は懲役6年になりました。

島根あさひ社会復帰促進センター、Therapeutic Community

映画館も新型コロナウイルスの感染に気をつけて、空席を設けながら上映しはじめた2020年の10月頃、ようやく私は川越スカラ座で坂上香監督の『PRISON CIRCLE』⁶を拝見することができました。そうです、Aさん

⁶ 坂上さんは、『ライファーズ 終身刑を超えて』など米国の受刑者を取材し続けてきた監督で、この『PRISON CIRCLE』では、取材許可がおけるまでに6年かかったといます。そして許可が降りて、2年間にもわたる塀の中の取材をへてこの作品ができあがったそうです。監督のメッセージには次のようなことが述べられています。「刑務所が舞台ではあるけれども、刑務所についての映画ではありません。犯罪者と呼ばれる人が主人公ですが、彼らだけの話ではありません。他者の本音に耳を傾けることで、言葉を感情を、人生を取り戻していく。彼らも、私たちも、そこからしか出発できない。犯罪をめぐる、四半世紀あまりの取材を通して実感してきたことです。彼らの言葉に、じっと耳を傾けてみてください。今ま

が収容されていた島根あさひ社会復帰促進センターが舞台の作品です。

「ああ、A さんもここでプログラムに参加していたんだな」と思いふけりながらも、どんどんと映像に引き込まれていきました。

なかでも忘れもしないのは、受刑者同士がロールプレイをして、被害者役や自分の家族役に話しかけようとするシーンです。私が今回 A さんの手記を読ませてもらいながら、あのシーンがリンクし、「許し」が私のテーマになったきっかけといっても過言ではありません。

さて、私は残念ながら島根あさひ社会復帰促進センターを訪れたことはないのですが、こういった場所なのか、センターのホームページを拝見するしかすべがありませんでした。

センターのホームページによると、社会復帰促進センターは、法務省が PFI 手法 (Private Finance Initiative) ⁷により整備し、平成 19 年 4 月から平成

で見えなかった何かが、見えてくるはずです」(『PRISON CIRCLE』公式ホームページより)。

⁷ 内閣府によると、PFI は、「公共施設等の建設、維持管理、運営等を民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用して行う新しい手法」とされており、国や地方公共団体等が直接実施するよりも効率的・効果的に公共サービスを提供できる事業について、PFI 方式を採用するとしています。日本では PFI 法が平成 11 年に制定され、公営住宅や医療施設、駐車場などの公共施設で実施されています。『PFI 手法による刑事施設の運営事業の在り方に関する検討会議報告書』によると、刑事施設の職員の過重な業務負担を背景に、民間委託が進められたとされています。また政府全体の施策として、官製市場の民間開放が進められ、その一環として、刑事施設の運営業務の一部を民間事業者に担わせることで、刑事施設所在地周辺における雇用創出や経済効果も期待される、とされています。島根あさひ社会復帰促進センターの事業者は島根あさひ大林組・ALSOK グループで、事業期間は 20 年間 (平成 18 年 10 月 20 日から平成 38 年 3 月 31 日まで)。収容定員は 2,000 人。平成 27 年末には受刑者等の全体の収容人員は約 5 万 2 千人まで減少したため、収容率も 71.4%まで低下し、当初の過剰収容状況は解消されていることに伴い、センターの収容率も低下しています。

20年10月までにかけて運営を開始した「刑務所」であり、島根は4庁のうちのひとつであるとあります。

センターの特徴はまず、官民協働の運営であることがあげられます。そして、地元の旭町の誘致によって整備された施設であり、官民・地域が力を合わせて、受刑者の再犯を防止すること、人材を再生することを使命とする、とされています。

そして、受刑者は刑務所への収容が初めてであり、暴力団関係者でない、心身に著しい障害がない、集団生活に順応できるなどの条件を満たす男子受刑者を収容するとされています。

Aさんもいわゆる刑務所ではなく、センターに収容先が決まったとき、とてもとまどっていらっしやいましたね。

社会福祉センター。なんですか？ってボク聞いたんですよ。刑務所？何ですか。いや、日本で初めてできた刑務所だと。そこは今言うようにオレもようわからんけど、刑務官がね。でも教育、あれをして更生に対するほんとにアメリカからのいろんなものを導入して、勉強したりなんだかんだするあれだから、まあ一応お前とお前は一応妥当だろうと思うから、一応そっちへ行ってもらうようにしたと。

センターに収容された初日、Aさんは「大企業の工場のようにびっくりする」「ICタグをつけて自由に行動できるのにおどろきを感じた」と記されています⁸。また収容された初日には、「不安心配等で眠ることが出来なかったが」と、これからの生活に不安を感じつつも、「ああこれからが本当の

⁸ 施設内では原則として、職員は付き添わず、受刑者は単独で移動することが可能です。そのために、ITを活用して受刑者の位置情報を把握するシステムが導入されています。この位置情報は中央監視室にある統合ビューアに表示され、民間の警備員によって、受刑者の位置情報を把握され、移動状況のカメラ監視、電気錠の施錠等が行なわれています（島根あさひ社会復帰促進センターのホームページより）。

受刑生活が始まるのだと思った」と、覚悟を記されています。

センターでは、回復共同体プログラム (Therapeutic Community : 通称 TC) が設置されています。これは、「各受刑者の問題性に応じた自助グループを形成して実施する改善指導のプログラム」(『PFI 手法による刑事施設の運営事業の在り方に関する検討会議報告書』より) で、その特徴は「共同体での他者との関わりと役割および責任を果たすことを通じて、個人の課題解決と成長・回復を目指すことが中核にある」(藤岡 2019:26) とされています。

センターに入所してから 2 ヶ月後、A さんは TC に配属されました。「待ちに待った TC への配役が」、「(TC が) どのように進行していくのかも不安であった」、「(TC に) 選んでいただいたことに感謝し何かを学び、社会へ持って帰ろうと決意」と記録されています。A さんは、1 期生として受講することになりました。

始めてみると、勉強する内容が難しく(「むつかしく何が何だか意味不明であったが・・・」)、悪戦苦闘されている様子が伺えました(「毎日毎日が教育(勉強の日々であった)」)。

TC で A さんが何を発言されたのか、そして何を記されていたのか、手記には様子が描かれていませんでした。唯一残っていた片鱗は、「A さんはあまやかされて育ったのが原因だね」と TC の時に言われたというエピソードのみでした。その時、A さんは何を考えていたのでしょうか。手記にまったくといっていいほど TC の様子が描かれていないという重みに想像をはたらかせました。逃げたくなることもあったんじゃないかと思います。

最大 1 年半の在籍のところ、結局 A さんは特例で 20 ヶ月もの間、TC に在籍することが認められました⁹。

⁹ TC も含めた受刑者処遇全体の流れは、1 期から 5 期にわけられており、1 期の基礎講座が終わり次第、刑務作業や職業訓練(随時)、そして被害者理解プログラム・回復共同体プログラム(2 期)が実施されています。3 期は各受刑者の問題に対応したプログラム、4 期は社会復帰にむけての準備プログラム、そして 5 期の釈放前指導を経て出所となります(島根あさひ社会復帰促進センターのホームページ

また島根のセンターでは受刑者全員を対象とした職業訓練を設けています。職業訓練で A さんは、介護ヘルパー 2 級、販売士 3 級、建設機械に関する複数の資格を取得されています¹⁰。

ちょうど TC に 4 期生が入ってきた頃から、TC の中で、「受刑者が受刑者に教える」という役割ができたとされています。この時、1 期生である A さんが、「教える側」にまわったことは、他の受刑者の社会復帰に役立ちたいという出所後の A さんの活動へのきっかけと少なからずなったのではないのでしょうか。

ガンと家族

車両系建設機械運転技能者の試験を終えて控え室に戻った頃、A さんは突然刑務官に呼ばれ、医務室に行く様に指示されました。作業服から居室着に着替えた A さんは不安な気持ちでいっぱいになりながら、医務室へと向かったといます。

担当医師から「何度も検査しましたが直腸ガンですすぐ手術が必要ですので・・・」とのこと聞いたときに「うそでしょ」と医師から「本当です」と写真を見せてもらい認識するが、パニックに我をも忘れ頭の中は真白、目の前は真黒に・・・死をも覚悟・・・何のために「島根あさひ社会復帰促進センター」で TC に各種の職業訓練に社会復帰促進センターで必死に学んできたのか・・・支えてくれている方々にもう合う事（ママ）はないのではと・・・良いも悪いも「手術」＝「死」自分はもう死んで行くのだな～どこで死ぬのかな、死んだらどうなるのかな、など死

より）。

¹⁰ 平成 27 年の刑事施設全体の出所者数は 2 万 3,566 人であり、このうち職業訓練受講者数は 3,218 人、免許取得者は 2,141 人（9.1%）。社会復帰促進センター4 施設の出所受刑者数は 2,225 人、職業訓練受講者数は 1,216 人、資格又は免許取得者数は 529 人（24.7%）とされています（『PFI 手法による刑事施設の運営事業の在り方に関する検討会議報告書』より）。

を想像し自暴自棄に・・・(不明) 支えてくれている方に謝罪し続けるが

Aさんはガンの告知を受けました。そして病棟での生活が始まりました。Aさんは、一時的に一般工場ユニット（洗濯工場）の軽作業にまわされることとなりました。

そこではユニットのメンバーから励まされ、Aさんは感動したといいます。またTCでは心理士の先生から「●●から帰ったらフォローアップ等会いましょう。ガンに負けずがんばって待っているから」と声をかけてもらい、Aさんは嬉しかったと記されています。しかし、また島根に戻ることができるのか、そもそも生き延びることができるのか、言葉にならない思いも同時に記されていました。

Aさんは病棟に移ってから、内縁のBさんには一切手紙¹¹を書いていませんでした。「Bさん、(Bさんの)両親に報告すべきかと悩む。『ガン』と告げれば今以上に心配する事を思うと・・・手紙が書けない・・・辛く苦しく情けないが・・・」。

Z医療刑務所での手術が決定したものの、AさんはBさんにはそのことを告げることはできませんでした。「手術の成功を信じている自分。手術後自由に何事もない事。その時に報告しようと・・・」。

手術は成功したものの、直腸をすべて切除しているため、術後は激痛の日々だったと記されています。苦しい日々が続く中で、「ここで死んでしま

¹¹ 受刑者との手紙のやりとりとして、受刑者側から発信するものについては優遇区分によって異なるようで、最も少ない場合、一月に4通までの制限とされています。また犯罪性のある人、発受によりセンターの規律や秩序を害し、又は受刑者の矯正処遇の適切な実施に支障を生ずるおそれのある人（親族を除く）については、できない場合があるとされています。また、手紙の内容によっては（暗号等の使用、刑罰法令に触れるようなもの、施設の規律・秩序を害するおそれのあるもの、受刑者の矯正処遇の適切な実施に支障を生ずるおそれがあるものなど）、発受の制限（差止め、削除、抹消）をされる場合があるとされています（島根あさひ社会復帰促進センター「よくある質問と回答」より）。

うかなと・・・」「もうだめだ。死んだ方がいいのか・・・」といったような希死念慮も記されています。

しかし2ヶ月ほどたったころ、抗がん剤で治療しつつ、症状が和らぎはじめます。そしてようやくAさんはBさんに「今は元気です」と手紙を送ったといいます。そしてBさんからの返信を読み、「心配してくれている様子が手にとるように伝わり情けなく涙する」と記されています。

夏の暑さが本格的になった頃。Bさんと、Bさんの両親が面会に訪れました。しかし直接Aさんと面会できたのは、制度の関係でお父さんのみでした。その時の様子をAさんは詳細に記しています。

直接面会出来たのは、お父さんのみ（身元引受人）でBさん、お母さんとは面会出来なかった。面会に来てくれる日程等も手紙で返信していただいているので、担当刑務官さんに伝え自分自身、最高にうれしく申し思いで（ママ）一日一日何年ぶりに合える（ママ）と思っていたのに。担当刑務官、面会担当刑務官さんと言論。自分の主張、面会できない理由（面会登録済みであるので）再三抗議するが（これ以上反抗すれば面会も涙・・・懲罪（ママ）の対象になるとのこと懲罪になってもBさん、お母さんに合いたかって（ママ）悔しかった。●●から何時もかけ又高年の両親に申し訳ない思いと涙が止まらず。お父さんの面接時間も。面会、自分の思い。お父さんの思いも聞くことも出来なかった。お父さんから「Bも母さんもがっかりして泣いている。二人とも元気、そして元気な顔を見れた、とにかく体をだいじにしてゆっくり話し出来るようがんばれよ・・・」と。本当に両親の心情を思うと一生の思いと、悔した（ママ）残念と思うばかり・・・

Aさんの抗がん剤治療は夏の間続きました。そして入院も7ヶ月がすぎた秋頃。さらに症状が和らいだことから、ようやく島根のセンターへ戻ることが決定しました。「長かったが、ここまで回復出来たのだと・・・生きて帰れるのだと」と記されていますが、もうAさんの中では、島根のセンターはやはり特別な場所になっていたのでしょうか。それともこれは出所

が見えてきたことへの嬉しさだったのでしょうか。「副作用等有るが一步一步前進している事に安心感もあり又島根あさひに帰れる事の嬉しさが等、色々思い出され又耐えてよかったと・・・」。

そして冬にさしかかった頃。Aさんは島根のセンターへと移送されました。その前日、Aさんは独居で一晩中泣き続けたといえます。

仮釈放へ

仮面接後あらためて自分自身を見直し T.C.所業訓練等で学んだ事を生かせる様にそしてどんなことがあっても自決したり再犯しない事を心に近い出所まで今まで以上に緊張感をもって無事故無違反なく大切に日々をと・・・(H25.10.30)

Aさんは引き続き治療を受けながら日々を過ごしていました。大阪から島根にもどって間もなく、Aさんは「仮面接のための面接」¹²を受けることになりました。しかし、身元引受人を Bさんの親とする許可はありませんでした。

入所以来ずっとこの様な自分に献身的にバックアップし続けていただき自分の支え励みになり自分を変えるために（道徳、心配、苦労ばかりであったので）TC教育、各職業訓練にも積極的に努力する事も出来たのだ・・・理由が理由であるのでこれ以上負担もかけられないし心配苦労辛さも二度と味わってもらいたくないので・・・。担当者の方から「決して引受が不許可になったからと言ってうらんだりにくんだり又暴力的発言等せず自分自身で受けとめる」とのこと。自分は反対に感謝と今ま

¹² これは Aさんの表現ですが、おそらく仮釈放に関する面接を目前にしたセンター内での面接のことだと思われます。身元引受人は基本的に親族になりますが、いろいろな事情で困難な場合は、知人あるいは更生保護施設に引き受けを依頼することができます。

での数々の支えをしていただいた事、又面会手紙等で犯罪内容等に対してもせめることなくかわりなく支え続けていただいている事に言葉では言いあらわせないほど感謝し続けていますし、満期出所又は仮釈放が許されてからも支えていただける事と思いますので……。がっかりしましたが、これが正当であると自覚しました。担当刑務官さんより「仮釈放も一から出なおしではあるが、体を第一に考えて今現在君の内容を理解していただける帰住地、引受人を選んでいこうと思っていますので」と……。嬉しかったです。でも不安はありますが……。

もう自分は担当者の献身的な言葉に感謝し泣きくずれる思いでした。

仮釈放は振り出しに戻りました。新年になってまもない頃。Aさんは「センターで何回目の正月なのか」と振り返りつつ、今年が満期であることを記されています。

その後、Aさんは仮釈放担当の職員から紹介された「ささしま共生会」の橋本さんに「願箋」を出すことになりました。

そして春頃。Aさんに引受人通知が届きました。結果は決定でした。職員からも次のような言葉をかけられたといえます。

体に気をつけて再犯しないでここで学んだことを生かして下さい。
NPO 法人さんにお世話になるのは、島根あさひ社会復帰促進センターでは初めてですので自覚してがんばってください。あなたの受刑中を見れば必ず前向きに進めると思います。色々あると思いますが、耐えて下さい。次のステップへ進んで下さい。

長かった受刑生活を思い出して涙が止まらないAさん。生きて帰れることの喜びとともに、これまでお世話になった多くの人たちに感謝するAさん。

平成26年の6月。一層の緊張感をもって、すべて理解するつもりで「釈

前教育」¹³を受けた後、Aさんは仮釈放になりました。多くの職員に声をかけてもらい、見送られたといえます。

Aさんは島根から広島に向かい、そして名古屋を目指しました。Aさんは車中から景色を眺めながら心の中で葛藤を繰り返していました。今後自分はどうなるのか。どのような立場で生きていくのか。何もできない自分。このまま名古屋に着いてもいいのか、と。そうした中、AさんはBさんからの手紙を読んでいたといえます。

仮釈放されても不安も心配も悩みも苦しみも悲しみもあるでしょう。でも今それを思っても前に進みません。良い思い出、心にひめた思い出は大切にそれ以外は通りすぎる各駅において気を付けて帰って

¹³ これはAさんの表現ですが、釈放前指導を意味します。Aさんの手記の中にも指導の内容の一部が記録されていました。「よりよい生活をおくるために」という項目の中には、所内生活での1日の過ごし方と、今後社会に出てからの1日の過ごし方についてそれぞれ良いところと悪いところを比較したり、「お金を適切に使うために」という項目では、「お金は生活していくのにとっても大切な存在のひとつであると思います。お金がない状況というのはとても不安になりますがしかしたくさんあればあることで不安になったりあつという間に浪費してしまったり又お金がたくさんあることで人の話が聞けなかったということもあると思います。そのお金とのつきあいかたについて考えてみたいと思います」とAさんの思いが、記録されています。他にも「今までの生活でお金がある時とない時について良いところと悪いところを考える。今までの生活でお金をうまく使えなかったことがあればその時お金をどのように使っていたか内容を書く。例えば生活に必要なお金は部屋代、文通費、食費、光熱費、電話代、衣類代、趣味などです。つつい使ってしまうお金として、遊ぶお金、酒代、たばこ代、ギャンブル、借金の返済などあると思う。大まかにいくら使っていたか」「生活費が足りなくて借金をしてしまった経験はありますか。もしあればその気持ちを」という項目などがありましたが、Aさんの考えについては記録されていませんでした。指導は他にも社会保障制度や出所後の仲間づくり、社会貢献などについて講義があったようです。

来て下さい。私たちは何もすることが出来ません。本当にごめんなさい。あなたを助けてくださった橋本さんに感謝して、橋本さんの支援指示にしたがって新たなスタートをして下さい。あなたが手紙で私に伝えた事全部理解していますから。逢えたら涙はやめましょうね。一言、私に「よくがんばったナ」と。この言葉を私は心にあなたの帰りを待っていましたので……。でも罪を犯したことは本当です。たえず心に置き罪を犯した一人間として今後皆さんの信頼、信用等理解していただけるよう努力して下さい。私も何も出来ないが、少しでも力を……。又私にも以前のように力をかしてネ。両親も又あなたの友人も仕事仲間の方々も今になってやっと理解してくれていますので……。でももう過去の事。あなたは今後橋本さんに必ず恩返しをして下さい。あなたなら出来る私には信じていますから……。

名古屋駅が近くなると Aさんは心の高ぶりを覚え、名古屋駅に降りた時は体全体の震えが止まらなかったとされています。

名古屋での生活のはじまり

釈放の当日。身元引受人である橋本さんは、名古屋駅まで Aさんを迎えにいきました。Aさんはそのことに大変驚かれて、「感謝と感動」と記されています。

そして早速、シェアハウス型の住居へと移動し、部屋のルールなどの説明を受けたといいます。そこでも橋本さん以外のスタッフを前に、Aさんは自分を支援してくれる人が、橋本さん 1人だけではないことに言葉を失うほど感動されています。

そして Aさんは部屋でしばらくおちついた後、Bさんに電話をかけました。すると Bさんは、そのシェアハウスの近くまできているという「サプライズ」が用意されていました。6年ぶりの再会に Aさんは、涙をおさえることができなかったといいます。

それを、あつて、もう、ほんでその、出所した時に、住所分かったか

ら、別れた女房が住所訪ねてきてくれたんです。びっくりしたんですよ。で、その時に、涙したつもりで、よかったね、元気で会えたね。その時はそんな話しかできなかったから、明日か明後日、あの私迎えに来てもいいかな、●●にきて (B さんの) お父さんお母さんたちに会ってやってくれる？って言った時にはめっちゃ嬉しかった。

B さんは「何も言わなくていいよ、会うだけで」と声をかけてくれたといっています。A さんは心のふるえがとまらなかったと記されています。そしてその出所初日の夜は、ゆっくりと休むことができたそうです。

翌日から新たな生活に向けて、A さんは慌ただしいスケジュールで動いていきます。まず保護観察所で橋本さん同行のもと面談がありました。翌日、A さんのガンの後遺症の関係で、橋本さんはシェアハウスよりも個室に移ったほうが良いと判断され、再び保護観察所で住まいを変える交渉も行いました。その橋本さんの行動力に A さんはいたく感動されていました。

そして、さらに翌日。A さんは B さんとの約束のもと、B さんの実家へと向かいました。

で、次の日に、飛んでったんですけど、その時にはみんな、もうすんだことだからいい、お前がそんなことすることないし、今までオレたちがどれだけあんたに苦勞をかけて、あの、色んな事してくれたか、もうほんとにわかってるから、もうそれはいいから、またあれしようよ、という形で、ほんとにその時認めてもらった時に、認めてもらったって言ったら語弊がありますが、嬉しかった、これからあれしようって、まあ、それが大きな支えだったですね。だから余計反対に、こういうことに関して、なんとかお役に立てれば、自分は安心して死んでいけるんじゃないかなっていう風に思った訳なんですよ。

後日、保護司との面接を経て、A さんは生活保護を申請し、新たな住居へと引っ越しました。こうした一連の手続きに橋本さんは同行されていたわけですが、A さんは「罪を犯した自分に対してこの様にさせていただく事

に・・・」と敬意の念を抱いています。とくに生活保護の申請は「何が何んだかわからず、橋本さんまかせで・・・」と慌ただしく日々が変化することにどこか戸惑いのようなものを感じられていたようです。

塀の中の人間ってというのは、不安材料が多いんですね、いくら強がり言っても。出たらどうしよう、身元、身元引受人はいない、要はもう70%ぐらい身元引受人がないんですね、ボクの知ってる範囲では。その人たちの不安をいかに解消していかにかう、それがいないからやけっぱちになってるのもいんですよ、満期でいいや、満期で明日から酒飲もうがたばこ吸おうが何やろうがええやないか、という感覚なんですね。で、そういう、もう塀の中だったら、ほんとに不安材料がいっぱいだけど、そういう心の抛り所ですね。まあ今言うように、身元引受人のいる人はいいですよ、もうほんとに毎日ルンルンな話ですわ。ですけど、帰るところがないという者に関しては、すごい複雑な心境ですよ。もう犯罪はしたくないけれども、でも出たら、っていうのがボクは（再び）犯罪につながってんだろうと思う。

Aさんが刑務所の中で想像していたよりも、はるかに手厚い支援を受けながらAさんの新たな生活がはじまりました。その生活が3週間経ったあたりで、Aさんは以下のような文章を記しています。

約3週間の間に自分が想像していなかった世界であった。島根あさひ社会復帰センターで色々悩み考え苦しみ今後（出所後）のことを不安と心配ですごしたあの時を思うと自分が思っていた以上の出来事ばかり・・・。自分が入所中にNPO法人ささしま共生会橋本さんはじめ多くの方々から罪を犯した自分にご支援とご尽力いただいていた事が痛いほど感じ、ただただ感謝の言葉も出ないほど嬉しく思うばかりでした。この様に、出所後すべての準備をしていただき、何不自由することなくすべて行なっていたいただいていた事、又、橋本さんがほぼ毎日付きそっていただき又各所に同行と橋本さんの行動力そして今まで活躍されていた事

が手に取るように理解出来た。自分もこのような立場ではあるが、橋本さん（NPO 法人ささしま共生会）に少しでも恩返しが出来ればと強く思う。「島根あさひ社会復帰促進センター」T.C 教育で学んだことなど生かせ（ママ）協力出来れば。又、この様にサポートしていただける。自分も現在受刑中、そのた社会復帰を目ざしている方へ協力が出来ればと思う。「現実には不可能かも……。元受刑者の身……。でも何か役立つことがあるのでは……。橋本さんのお役に立つことが……。」と強く思う。

A さんは出所後も頻繁に通院を続けていましたが、その合間に、ささしま共生会の炊き出し活動を支えるボランティアにも参加しはじめることになりました。その時の気持ちを、橋本さんへの感謝とともに、びっしりと1頁にわたって記されています。

手術後であったが、何かをもとめて実行する事によって精神的に落ち着き、又達成感をも感じた。ボランティア活動参加により、働くよろこびと他の方々とのコミュニケーションが出来た事に感激と感謝。又共有する事も多々あった事に今後も機会があれば参加をと……。

1週間に3回ほどの通院、またときには入院・手術の日々が続きながらも、A さんは橋本さんの日常の活動を間近で見ながら、自分も何か役に立ちたいという気持ちを強くされていきます。なかでも、ホームレス状態の人々を支援する年末年始の越冬活動では、「各支援物資、現金等、多くの方の善意に感動とおどろきを感じる。この様に多くの方々が協力していただき成り立っているのかと……」と、人々の支援が社会的に組み立っている様子を目の当たりにされ、非常に感動されています。そしておそらくこの頃から、A さんは出所者支援に取り組みたいと覚悟されたのではないのでしょうか。

しかし、これからというところで再びガンが転移してしまいます。これまで毎日のように通院し、ときには入院もしてきたのにと、ぼう然とする A さん。入院中は B さん、橋本さんたちの励ましもあったといいます。

「自分の出来ることが今何一つ出来ていない。これで負ければ一生悔いが残ると・・・」と記されているように、不安と恐怖におしつぶされそうになる日が続いたようです。それでも Aさんは、なんとか退院することができました。

退院後の5月の連休のこと。Aさんは島根のセンターで過ごした連休や、身元引受人が決まった時に刑務官から励まされたことなど色々と思い出しつつ、生まれ故郷へ墓参りに行きました。

過去を思い又捨て新たな居場所、名古屋で見つけようと・・・ふるさとを捨てる事は出来ないが・・・罪を犯した罰であると自覚・・・でも忘れないが・・・

度重なる診療・検査と、ささしま共生会でのボランティアが続き、そして出所1年後のところでAさんの手記は終わっています。

感謝とともに、「少しは信頼される様になったのかな」と、出所後の1年を振り返られています。

そこから5年後にAさんは亡くられました。

「許し」への覚悟

出所間近になったときに、(臨床心理士の)O先生から言われたのは、「Aさん、出た時に、その人たちにどういう謝罪をしますか？」で聞かれたときに、返答に困ったんです。ほんとのことって。ほんとだったら、ごめん、申し訳なかったなって言うことしかできない。でも、「先生、ボク、顔見て1人1人謝罪の仕方が違うと思うから、今ここで発表できません」「あ、そういう考え方だね、それはやっぱりAさんの考え方だね、いいから、自分の意思が通るように説明して、ちゃんと説明責任して、次のことを、だからボクはこういうようにします、っていうことを必ず付け加えなさいね」って言われたから。

Aさん。今回、Aさんの手記をまとめさせてもらう中で、私が考えたことは「許し」についてでした。この臨床心理士の先生と、Aさんのやりとりにもあるように、「申し訳なかったなって言うことしかできない」という一言の重みにふれたとき、私自身のこれまでの「過ち」などが、ふと頭の中を横切り、しばらく私は言葉を失うような、心を奪われるような、どこか後ろめたい状態に陥ってしまいました。いったい自分はどうやって、いろいろと許してもらってきたんだろうと。

Aさんの出所後の通院・入院歴の記録を拝見していると、Aさんはご自身の体がもう長くないということをご自分で感じていらっしやったのかもしれませんが。駆り立てられているかのような「許し」への焦りは、手記の中の鬼気迫るような日々の記録からも伝わりました。

そのことから、法制度的に刑を終えて出所したからといって「許し」が完了するわけではない、という社会的な事実の重みをあらためて私は思い知りました。むしろ出所後にAさんの中で、ずっと反省的に「許し」への道筋を反芻していらっしやるようにすら感じるのです。

その道筋を出所後、Aさんは橋本さんの支援を受けながら徐々に見出されたのだと思います。自身も役に立ちたいと思い立ち、ボランティア活動に貢献することで、様々な人々から信頼を得ていくという新たな生活の道筋が。そして出所者支援に取り組むことで、道筋をさらに確かなものにしようと決心されていたのだと思います。

しかし他方で、「許し」はAさんが変わっていくことで段階的なかたちで容易に達成されるようなものではないということも、Aさんの手記から鮮明に伝わりました。というのも、出所後に被害者への謝罪についてどのようにすべきかをAさんが思案していた際、担当弁護士から「被害者は会いたくないと言っている」と告げられたとされていました。Aさんは、根源的には「許し」を得ることができないと、どこかで気づかれていたのかもしれませんが。

そしてまた「許し」を与える側のひとりである内縁のBさんが、献身的にAさんを支えられたいっぽうで、手紙の中で、「でも罪を犯したことは本当です。たえず心に置き罪を犯した一人間として」とAさんに念を押すよ

うに忠告されている点も印象的でした。

そしてなにより、Aさんがご自身の故郷への墓参りで、「罪を犯した罰であると自覚」しながら、「ふるさとを捨てる」ことに逡巡されている姿は、その裏返しとして、過去を消すことはできないという圧倒的な事実押しつぶされそうになっている様子としても、ありありと見えてきました。

出所後に名古屋という新たな土地で数年を生きたAさん。その数年は、「許されない」という根源的な事実に向き合いながら、不可逆を引き受けようとする覚悟の連続の日々だったのではないのでしょうか。

Aさんの121枚におよぶ手記の中で、一箇所だけ、ご自身の罪について吐露されている頁がありました。それはおそらく獄中からBさんに向けた手紙の下書きだと思われます。断片的な文章が乱雑に記されていました。それらの文章を組み立てると以下のようなかたちになったのでしょうか。

「罪の重さ、深さが胸にのしかかって来ました」

「いろいろ反省させられ苦しみました。苦しみはまだまだ続くでしょう」

「もちろんBさんの方が何倍も何倍か苦しみ悲しかったことでしょう」

「過度の犠牲と負担を強いていて」

「なぜ虚飾の人生から脱却できなかつたのか。なぜ短絡的な犯行に走ってしまったのか。悔やまれてならない」

「ご家族の皆さんがどのように悲しみどのように憎みどのように恨んで来たか。気持ちが分かりました。感情をおさえていらっしやいました」

「厳しさは想像以上でしたが今思えばよかつたのだと思います。あきらめたり逃げ出したりしなくて本当によかつたと」

文献

藤岡淳子編著、2019、『治療共同体実践ガイド』金剛出版。

法務省矯正局、2017、『PFI手法による刑事施設の運営事業の在り方に関する検討会議報告書』。

-----、2018、『PFI手法による刑事施設の運営事業の在り方に関する検討会

議報告書』.

掛川直之、2020、『犯罪からの社会復帰を問いなおす--地域共生社会におけるソーシャルワークのかたち』旬報社.

三浦耕吉郎、2017、『エッジを歩く--手紙による差別論』晃洋書房.

毛利真弓・藤岡淳子、2018、「刑務所内治療共同体の再入所低下効果--傾向スコアによる交絡調整を用いた検証」『犯罪心理学研究』56(1) :29-46.

内閣府「PPP/PFI とは」

https://www8.cao.go.jp/pfi/pfi_jouhou/aboutpfi/aboutpfi_index.html (2020年12月29日閲覧).

島根あさひ社会復帰促進センター <http://www.shimaneasahi-rpc.go.jp> (2020年12月29日閲覧).

島根あさひ社会復帰促進センター 「よくある質問と回答」

<http://www.shimaneasahi-rpc.go.jp/pdf/faq.pdf> (2020年12月29日閲覧).

坂上香、2019、『PRISON CIRCLE』.

矢野恵美・上瀬由美子・齋藤実、2014、『地域と刑務所の共生・共創は可能か』日工組社会安全財団2013年度一般研究助成最終報告書

http://www.syaanken.or.jp/wp-content/uploads/2015/01/RP2013A_006.pdf (2020年12月29日閲覧).

第3章

変わるかもしれないという期待

掛川 直之

この章では、Aさんが受刑中に同じ時をすごし、出所後も交流があったCさんへのインタビューの内容を中心に綴っていきます。Cさんには、Cさんご自身のこと、さらにはAさんとの関係についてお聴きしています。

1 Aさんと出会うまでのCさん¹⁴

Cさんは、Aさんと同じ島根あさひ社会復帰促進センターのご出身です。わたしから見ても、AさんとCさんとは、とても仲が良く、親交が深かったイメージがあります。Aさんのお話をうかがう前に、Cさんご自身のことも聴かせていただいたので、少しふりかえっていきたいと思います。

Cさんはインタビュー時点でもう出所後10年になるそうです。CさんとAさんとの出会いはTCで、ともに1期生だったと聴いています。Cさんは、覚せい剤の所持と自己使用とで、前に執行猶予判決を受けていたものも上乗せされて3年の刑期を勤めることになったということでした。はじめはX刑務所にいて、そのあとY刑務所へ。さらに島根あさひ社会復帰促進センターに移送されて、TCにいたのは1年くらいだったと聴いています。

掛川：X刑の印象ってどうですか？

Cさん：X刑はね。あの、こういうこと言うたらおかしいんやけど、ま、

¹⁴ Cさんへのインタビューは、ささしまサポートセンターにおいて2020年10月30日におこなったものです。本章で引用する対話は、とくに断りのない限り、このインタビューからのものです。

知り合いの人が多くて

掛川：入ってる人に？

Cさん：はい

掛川：受刑者ですよ？

Cさん：よくしてもらえてたんですよ。後頭部たたかれて

掛川：おーいみたいな

Cさん：おまえのツレあそこおんぞみみたいな

掛川：そんなネットワークが

Cさん：鳩とびまわっとおから、刑務所って案外ねー

「鳩が飛ぶ」というのは、「情報がまわる」ということを意味するスラングなんですね。もうずいぶん刑務所にいた人のお話を聴かせてもらっていますが、まだまだ知らないことがたくさんあって興味は尽きません。

橋本さん：それはその流通の関係で、知ってたみたいな感じなんですか？

Cさん：でしょうね。流通もそうやし、まままま

橋本さん：買った人

Cさん：ボクたちの友人とか、その何というかな、ネットワークがあって、旧知の親友もあるやないですか

橋本さん：割りと近いところで、だからそういう意味では売り買いみたいな

Cさん：そうですね、うーん、もうそんなもう覚せい剤触つとう人なんか、順番に数珠繋ぎにパクられていくじゃないですか。ほんでね、みんな仕入れるとこ、人いうたら、おんなじもんなるんで。ぱっとね、町で買う人らは、そんなないと思う

Cさんが薬物に手を出した背景には、複雑な出自があったとされています。そして、その背景には、ご両親が受けた差別の経験も深く関係しています。

Cさん：ボクの家が貧困家庭で、そのボクが勉強であったり、ボク勉

強好きやったんですよ。うーん、そういう勉強もできへんかったし、で思うようにいきたい学校も行けなかったし、大学も行ってなかったし。で、まあね、学校行ったら、宿題もせんし、なんやかんやずっとずっとこうなんというのか、先生にも怒られるし、なんか注目の的みたいなんなってて、いじめじゃないんやけど

橋本さん：え、怒られる出来の悪い子みたいな悪注目？

Cさん：そうそうそうそう

橋本さん：ふんふん

Cさん：そんなずっと環境の中で、過ごしてて、勉強とかもほんまにしたいくてできないまま中学校。それで高校だけはいきなさい、って約束してたんでほんで高校行っても、学費が払われへん、家計がね、ちょっと火の車なって。昔の学校の先生で、また払ってへんぞってごつつうみんなの前で言われるからやめるや、やめやへんやみたいなんなって、そのなんていうかな、そのずっと続いてて、学校までいやなって、単車とか、タバコ吸ったり、喧嘩したり、なんやかんやで、もうずっと停学なってて。学校の先生も学校来るなって言われて、卒業、一応卒業はできたんやけど、こんな状況の中でずーと続いて、まあ高校は卒業できました。で、行くところないし、どうやら、まあ親戚のおっちゃんとかいってきますと、若い人ちゃいますよ。もうそこで仕事してて、建築関係なんですけどね、でまあ、なんかずーと自分の中でまだ若いのに人生こんな仕事しかでけへんのかみたいなの、考えながら仕事続けて。で、結婚、結婚、自分も男なんで結婚する時期があるじゃないですか、そうなってくると立て続けに部落、あのボク部落出身者なんで、母親がね。二つの名前を使う母親で。まあまあ、そんな関係で感じずーと、破断、破断が続いて。でまあもうなんていうの、自分が嫌になったんと、でなんで自分勉強してこやんかったんや、って自分を責めるとこと、家庭を責めるところいろいろあって

橋本さん：出自とかね

Cさん：はい。もうなんもかもなくしてみたい、自分をもうまったくゼロの自分にしたい、みたいな変な考え方になっていて

橋本さん：なるほどなるほど

Cさん：で、まあ、当たったところに覚せい剤みたいななんがあつて

橋本さん：それはそんなときに、そのすげーネガティブな色んなものから薬物使つてると逃れられたということですか

Cさん：そうですね、恨むんなら、自分の血を恨めみたいなこと言われて。そんでなんて言うのかな、オレが責められんねんやったらいいねん。その勉強もしてきてへんし、ま、そのときは自分も若い子8人ぐらい使つてしとったんかな、使つてしとつてんけど。一応、収益もあつたし、人なりにね、暮らしはできんねんけど、親責められたり、その一番腹立てて、やっぱその母親が苦しかった姿いっぱい見てきてるじゃないですか。それを許されへんかって、その許されへん原因なんやねんやろうて。やっぱり自分がその何、そんなんにかまけてなんもしてこうへんかった今の自分みたいななんがあるんやなあおもて。なんか、自分を責めるのに、なんで自分を責めなあかんねんみたいな、なんかね、全てがうまく自分なんというんかな、まとまった考えができへんかって。うーん、客観的な自分が見えへんかったし、なんかもうええわーって覚せい剤走つて

橋本さん：逃避みたいな感じですかね、覚せい剤に逃げるっていうか

Cさん：は一そういう感じですね、いい言葉ですね

橋本さん：マスクするっていうか

Cさん：そうやね、現実逃避やろうね、やっぱ

橋本さん：よく依存の文脈で語られるのって結構似たような話じゃないけれども、酒飲んで酔っ払っているときにはやっぱ楽になれるとか

Cさん：はいはいはいはい

橋本さん：そういうのと同じような感じにはなったんですか？

Cさん：そうですね、やっぱり興奮するから違うところになんか執着、集中できるところあって、お酒とちがって、お酒って結構思い出しちゃうじゃないですか？

橋本さん：向き合えなかった、というか向き合わなくてすんだ、薬物やってるときは

Cさん：そうやねうんうん

掛川：それは自分の置かれてる環境を直視したくなかったということですか？

Cさん：でしょうね、やっぱりね。うーん、そういう感覚まったくなくてんけど、やっぱりそのなかったんやけど、勝手にこう自分がしぶとってんね。うーん、やっぱりこうやってずーと何年か経って、ずーと考えれば考えるほど、そうなんかなという

橋本さん：うーん

Cさん：その、やっぱりね、なんかなんていうのかな。自分責めてくれたらいいのに、ていう思いもあったんやけど、それ以上に、自分はなんでこんな苦しい育ちのなかにおいてんやろ、なんか変なね、被害者みたいな

橋本さん：どうしようもできないですもんね。世界の不幸を背負った男.....

Cさん：ほんでどないか、税金も何で払わなあかんねん、みたいなね、正直な話ね

橋本さん：抑うつ的なっていうかね

掛川：まあなるほど

Cさん：うーん、そんな思いがいっぱいあって、それだけやないですね。やっぱその、うちの父親も仕事をいろいろね、頑張ってた探そうとしてた時もあるんやけど。だからうちの父親の親戚にそういう活動してる人はどっこの仕事も取ってくれない。会社は

掛川：その土地柄みたいななんもんもあつたんですかね？

C さん：そうですね。その部落と関係ない方の父親の影がね、そのヤクザやってた人の

掛川：あー、はい

C さん：訳のわからないことしとーから、まったく父親がまともな仕事できへんかって、もうなんかこう家ん中ぐちゃぐちゃで。ずっとそのお金ないのに父親はやっぱりパチンコとかいきたいつうか、行ってお金使つてとか。ずっとけんかするから、家で宿題とかできなくてボク。もう家におるのが、トラウマみたいで

橋本さん：うーん

C さん：思い出してまうねんね、けんかしてる場所になつた。父親と母親が喧嘩しっちゃってる場所が家だったんで、そこであの宿題集中してできへんかった。ましてや本なんか読まれへんかったんですよ。本なんか読みよつたら、なんかガサつてなんかオヤジ帰ってきたかな、おかん帰ってきたかなつてずっと思っちゃう。だから家帰つたらランドセルで外遊びにいつてまう

橋本さん：ふーん

C さん：その上で、おまえ宿題したんか言われて、もうしたしたとかつて嘘ばっかいうて、もう、してまう。ほんでまた次の日学校いったら、あんた宿題してへんつて言われて、みんなになじられて、とかそんなんね

こうしたなかで、薬物を常用しはじめた C さん。高校時代からはじめて 10 年くらいは使い続けていたそうです。

C さん：若いから、体力もあるんでその切れ目みたいな苦しさも全然なかったからね。ほんですぐやめれるわ、つて感じで、というか、その、行ったり行けへんかったり、中毒性ははじめはなかったで

すね

橋本さん：ふーん

C さん：うん二日ほど寝て、また体力もどってとか、もうその常連性、常習性につれて、やめられへんみたいな

橋本さん：今ってそのあたりの話ってできるっていうか、その、たとえばその思い出して不安定になるみたいなことはないですか？

C さん：まったくないですね、ボク自身がもう捕まる前、ボク自身が身体がもうガタガタなってもうとったから

橋本さん：あ、そうなんですね

C さん：やめらなあかん、ってもうわかつとって、きっかけ欲しくて、それでもやめられへんという

橋本さん：へー

C さん：ま、今でもちょっと胃とか腸とかも弱いし、すぐ風邪ひいてしまふ、みたいな(笑)それが薬物何かが関係あるのかわからへんけど。も一、とにかくもうね、もうこのままやったら違う意味で体力、というか死んでまうわ思て、思っとた矢先で

C さんが、薬物を手離すきっかけになったのは、逮捕だったそうです。強制的に有無をいわさずに隔離されるわけですから、きっかけにはなるのと思うのですが、それから止め続けられているというのは純粹にすごいことだなと思います。

掛川：じゃ捕まったのを契機にやめられたみたいな感じですか？

C さん：そうですね、うーん

掛川：刑務所入ってた時も薬とかは全然やりたいなーっていうのは、多かったですか？

C さん：そうですね、たまにその同じような同じポジションに、おるような人とか、受刑者とかいるじゃないですか。そういう覚せい剤の話になった時に同じ罪名で捕まってる人と話しよったときにうーん、たまに行きたいなと思たときあるけど、うーん

掛川：やりたくなくなっただけというか、やらなくてもいいかなと思えたのはいつ頃なんですか？

C さん：そうですね、はっきり、うーん、いつって、そのタイミングもまったくわからへんねんけど。ただ、一言言えるのはやっとなんかこれだけでやめれるって

掛川：捕まったときに思ったんですか？

C さん：思いましたね

掛川：それは警察に捕まったとき？

C さん：そうですね、警察もそうやし、警察捕まってそうちょっとね、留置所、拘置所であり、ちょっと落ち着いて考える時ってあるやないですか、これからどないしようとか、うーん。焦りとかそんなんはままだ、そんなんもあるんやけど、そんなんもちょっと落ち着いて、考えたときに、あーよかったんかなーとか思いましたね

C さんは、X 刑務所での考査期間を、なぜか少し長めにすごしたあとに、Y 刑務所へと配役されることになったそうです。少し繊細な C さんが、刑務所で生活しないといけないうのは、本当にしんどかったと思います。

掛川：Y 刑はどうでしたか？ 滋賀行った時の印象

C さん：Y 刑もね、やっぱりもう、やっぱり初めてなんでそこもね。へーこんななんんいう感じでしたね。ちょっとボク潔癖なところがあってご飯がずーと食べられなかったんやけど、X 刑まだ食べれるようになって。X 刑まだレトルト品が多かったから。缶詰とかね、缶詰やないんやけど缶詰みたいなやつ。缶詰のものをポンとお皿に乗せてもうたみたいなの(笑)

橋本さん：作ってもらったから食べなかったということですか？

C さん：そうですね、うん、なんかもう、誰かがつくったみたいなの、やっぱりどうしてもその、懲役がつくったやつやから

橋本さん：疑心暗鬼というか。へーそれはその前からってこと？

C さん：あ、それはもともと前からボクそんな気があったので、まます

いません(笑)

橋本さん：そのシャバにいる時におにぎり作ったとか？

Cさん：おにぎりが全然食べれへん

橋本さん：あ、もともとなんだ。べつに懲役の人がつくったからとかではなくって、ようは他の人がつくったから

Cさん：もっとわかりやすく言うたら、鍋と一緒に食べられへんのですよ

掛川：じゃ、Y刑で一番しんどかったことはじゃご飯が手作り感満載やったってのが？

Cさん：まずね、うーん。島根もそうやけど、今はもう業者さん作ってくれてるけど

掛川：はいはいはいはい

Cさん：で、島根は全然ね、逆においしかった

生きるための基盤になる衣食住のうちの「食」の問題で壁にぶち当たったCさん。はじめに炊場に配役されたCさんは、洗い場の担当だったのですが、料理を作っている現場を目の当たりにして余計に食べられなくなったそうです。そこで、Cさんは敢えて作業拒否をすることで懲罰を受けて、デパートの紙袋や百均で売っている紙袋を作っている紙折向上にかわったそうです。

Cさん：そうやね、そのやっぱりその人間関係できてまう前で、人間関係っていうても、そんな直近ばっかりの、なんていうかな、刑務所の中のルールあるやつが、受刑者は受刑者の中でそのルールみたいなんあって

掛川：Y刑は雑居やったんですか？

Cさん：Y刑は雑居です

掛川：じゃあ6人とか？

Cさん：うん。それはもうね、自分のポジション作るまでがやっぱりね、しんどいからね。この顔の感じやから、歯ないでしょ、ま妄想

像してください (笑)

掛川：ほなら入りたての頃ちゅうのはその6人部屋で一番下やから.....

Cさん：そうですね～

掛川：上の、一番長老みたいな人のいうこと聞くみたいな感じですか？

Cさん：まま、そんな感じやね～うーん。いじめられる子ってやっぱりおるじゃないですか。そんな子らは、とっことんやね、もうここで口で言われへんもん、うーん、とっことんやられてます。もう、そやから、なにもうこの部屋イヤやねん、って言うてもおやっさん出してくれへんから、もーわざとガラス割って

掛川：うーん

Cさん：そうそうそうそう、そんな方法しかないんで、そうやって出ていく子はいましたね

掛川：じゃ、もう出ていくためには懲罰受けるしかない、懲罰受ける部屋変え、リセットみたいな？

Cさん：そうやね、そうやね、はい

掛川：Cさんそれはなかったんすか？ 部屋で

Cさん：それはないね、もー

出所されてきたかたがたに、刑務所のなかで何が一番つらいかと尋ねると、多くのかたは、「人間関係」だと教えてくださいます。とくに、初入時がつらかったと.....。シャバでの生活や学校や会社でもそうだと思いますが、やはりまわりにどういう人がいるのか、ということは、改めてとても大事なことなのですよね。

掛川：Y刑にいたとき、これ、こういうのがあったから、今の人生役立ってるぞとかありますか？

Cさん：ないね、やっぱ休憩時間とかしゃべるときなんかは、やっぱその、なんていうんかな、なんちゃら自慢になってるんですよ、その「おれー・・・」

橋本さん：悪いことした？

C さん：そそそそ、シャブしたりとかね。

掛川：武勇伝（笑）

C さん：それでもうそういうとこにずっといたら、仲良うなっちゃった
ら、再犯をね誓い合うとか

掛川：再犯を誓い合う？（笑）

C さん：（笑）

橋本さん：また会おう、シャバで会おうみたいなの？

C さん：そうそうそうそう、もー

だれが言ったか「刑務所は、犯罪の大学である」と形容されることがありますが、刑務所が真の犯罪者を生むというのは紛れもない事実で、このあたりが一般的なイメージとは少し乖離があるところなのかもしれません。

2 AさんとCさんとの出会い

刑務所らしい刑務所での生活を送られてきた C さん。このあと、ついに島根あさひ社会復帰促進センターへと移送されることとなります。A さんが島根に行くことがうれしかったと言っていましたが、C さんははじめはそうでもなかったみたいです。

掛川：Y 刑で島根あさひに行け言われたときは、C さんは、A さんはもうなんかめっちゃ喜んでる記述が手記の中にあっただんですけど、C さんは嬉しかったんですか？

C さん：はじめ拒否しました

掛川：拒否？

C さん：だってもうそこで結構ポジションいうたらおかしいけども、ひとつの感情ができてたから

掛川：部屋のなかで上の立場に？

C さん：またまたそういう刑務所の中でややこしい人間関係をまたすんのも邪魔くさい、そういうマイナスの思考しかなかったから、も

うええわー拒否許否言っと思ってんけど

橋本さん：なんか前情報はあったんですか？ その島根あさひがどういうところかみたいなの？

Cさん：全然ないですよ。ええようにいうじゃないですか、おやっさんとかね。何々やから

橋本さん：新しいぞつって？

Cさん：言うたって刑務所やんかいとか思って

掛川：(笑)

Cさん：でしょ？(笑)全然違ったけどね

橋本さん：しかもね、どこまで刑務官の人が違いをわかってたかかっていうか、何を指向して島根あさひの運営とかね

Cさん：そうですね。そのおやっさん自体も所長かだれか知らんけど、聞いてボクらに教えてくれるわけじゃないですか。もう人伝えに、みたいなの。そのなんていうかな、伝聞みたいになって。どこまでほんまかわからないし、もうええわ、島根も人間関係があれやわ思って

掛川：島根に移送されるじゃないですか。島根でもまたなんかこう島根のルールを覚える考査期間みたいなのやつ、オリエンテーションみたいなのやつあったんですか？

Cさん：ありましたね、一般刑務所みたいなのではないですけどね。ゆるーとか思いました

掛川：TCは願箋書いて行きたいって行ったんですか？

Cさん：ボクは行きたくなかったんやけど

橋本さん：ふーん

Cさん：もともとあった工場の中に、今もまあ付き合いあるんやけど、同じ受刑者が「Cさん行こうな行こうな」って

掛川：あー

Cさん：で、勝手に願箋出して、オレもほんじゃしゃーないなと口車に乗せられて出すわーとか言うて。で、おやっさんもボくら二人ごっつい煙たかってたみたいやし。みたいでね

掛川：あ、工場担当の？

C さん：わかったわかったとか言って、行かしてもうたみたい

橋本さん：へー

C さん：P 先生は違うっていうんやけどね。そこのおやっさんは「わかったわかったお前ら二人にしとくから」みたいなこと言われて

掛川：島根の工場は最初どこ配役やったんですか？

C さん：あれね、何工場なんかなー、わからへんねやけど。そんなええ工場行ってないですよ、ごみを分けるみたいな工場ですね

橋本さん：ふーん

C さん：なんていうん、導線？

橋本さん：被膜はがしとか、B 型とかにね

掛川：おやっさんに、煙たがられてたつてのはなんでなんでそう思ったんですか？

C さん：わからん、ボクそんなないんですけど、ボクそんなあんましゃべるタイプじゃないんやけど、もう一人がようしゃべって、オレを道連れにするんすよ(笑)、「ねえ？C さん？」みたいに、何か知らんけど。「工場しゃべったらあかんねんて、お前」とか言うて(笑)

同じ工場に配役された仲間からの誘いで、半ば強引に TC への参加するための願箋を出したという C さん。TC のなかで、徐々にこれまでの自分をふりかえることが多くなっていたようでした。

C さん：もうそういう一つの問題クリアしたら、また違う問題みたいなんいっぱい出てきて、もう解決できない状態がずーと続いていたなかでの、育ってったから。うーん、なんか、たとばね、あの買い物行くじゃないですか、たまに連れて行ってもらうじゃないですか。ほんでそのお金ないから、路上駐車してまうとか。そういう環境のなかでずっと育ってるから、自分のなかで常識いうのがやっぱり人とちょっとずれてんねんね。やから、そういうことを言われてったん

やと思うし、今そういうのんが気づいたんがやっぱりあの、島根行って、TC 受けてから。自分は全然人とね、常識みたいなんが全然違うと。もうそのなかで育ってるから、それがボクの常識なんですよ
橋本さん：そうですね、うんうん

C さん：車なんかでも急いどーからいうてぶえーんと抜かしたりとか、ほんま車バツカリの話してまうけど

橋本さん：デフォルトというのか、モデルがね、もともとのモデルが違うと

C さん：そうですね

掛川：それはTC でそういうこれまでの自分を振り返る機会があったから島根で気づけたんですか？

C さん：そうですね、やっぱりその環境がよかったね。しっかり自分だけで考えるだけやったらあかんねんね。もう自分の考えやからね。全然人と違う考え。さっきも言った通り、もう自分のなかで、これがあかんねんや、ってそれは自分の考えでそれはひとと絶対ずれてるから。じゃやっぱりそのTC のなかで、人の話聞く、フィードバックしてもらおう。すると、なんでボクこれ違うんやると、そういうことに気づくくねんね

掛川：ふーん

C さん：ほんでたとえば、誰かがいい意見を言ってくれたり、アドバイスしてくれたり、良い行動してくれたら、行動ね。してくれたら、やっぱそれがモデルになる、モデルいうか、ああそうなんやって

掛川：なるほどね

C さん：反応してたところがありましたね。ボクは卒業、卒業というか出所するまで、それがなかなかできなくて。それ自身も反発してたんやけど、やっぱりそのずーと覚えてるじゃないですか。出所してから、あっ、そうなんやああなんやって思い出すことがいっぱいあって。やっぱ刑務所、特に島根で、全然わからへんかったけど難しい座学もあったし。わからへんかったけど、

そこがやっぱりきっかけなって

橋本さん：そのあとにつながるって感じですか、大学入学とか？

Cさん：つながるって感じですね、そこで勉強しただけやったら、もうそこで終わってしまうんですよ。やっぱ刑務所ってすごいずっと縦で割られちゃうじゃないですか、じゃあ、自己責任で仕事なりなんなり探してくださいと。やっぱその保護司の人とかいるけど、保護司の人とか形式的なもので。まあどのだれや分からん人に、自分の悩みとか言えないじゃないですか、何日かに一回の面談で

橋本さん：月一とかですかね？

Cさん：やっぱ、そのね、出所しても引き続いて、なにかこうちゃんと話が言えると。ボクは幸いにね、出所した後、すぐO先生だったり、今もままいろんな形でね、P先生だったり、その大学のゼミ生であったり、でやっぱ今お二人も、いろんな形でなんというのか、新しい出会いがあったんで。たまにこう会うというのが大事で

橋本さん：うん

Cさん：しっかりまたこの自分の方向ていうか、変な感じになっちゃってるんじゃないかって気づけるとというのが

掛川：Cさんさんが入った時は、TCやってたのがO先生とP先生が中心になって？

Cさん：そうですね、そうですね

掛川：で、あのファシリテートしてこう色々教えてくれたりだとか、TC運営したりだとか、まさにあの二人がやってた時代になかにいたんですね

Cさん：そうですね

橋本さん：なかなかレアな。TC一期生ってかなり贅沢だよな

Cさん：贅沢なんかな？ P先生、O先生っていう名前聞いたらそうやけど、ぐったぐったでしたよ、はじめ。一番はじめやからね

橋本さん：ふーん、手探り感というか？

C さん：こんな作ったんバンツてひっくり返してもうたりとか。他所や
ったらふつうに懲罰ですよ。AA とか NA とか、いっぱいあるじ
ゃないですか、グループ

橋本さん：はい

C さん：あ、はじめこんなんやったんかなとか、ダルクとかはね

橋本さん：なるほどーたしかに、グループミーティングの初期の頃って
いうのはね。考えればあり得るといふか

TC の 1 期生だったということで、A さんも C さんもまさにつくりあげて
いく過程を体験されていました。しかも、A グループと B グループという
ふうに 2 つのグループにわかれて運営されていた TC のなかで 2 人はグルー
プも同じだったといひます。

C さん：ボクもそうやけど、よその刑務所からこう引き抜かれた人間ば
っかりやんか

橋本さん：しかもそうですよね

C さん：昔の刑務所の型にはまってる人ばかり集まって

掛川：なるほど、A さんはどうでしたっけ？

橋本さん：W から

掛川：経由したわけではなくて直に拘置所から

C さん：来とう人もおるけど、それでも半分半分ですな

掛川：じゃあ半分くらいは？

C さん：たぶんその、先輩やから指導せいみたいなんで入れられたけど、
それが国の間違いですわ、あれは

掛川：たしかにね

C さん：もう型にはまってるもん

橋本さん：ある程度の指標じゃないけどこの人選抜しろみたいなのはあ
ったかもしれないけど

C さん：そうそうそうそうもう、そなんすんねんやったらはじめっか
ら新人ばかり寄せやな絶対まとまらないですよ

社会復帰促進センターを刑務所らしくしたのも旧来型の受刑者だったというこの話は興味深いところです。でも、以下の語りにあるように、旧来の刑務所で生き抜いてきた C さんが鼻を効かせて「A 爺」という愛称をつくってくれたおかげできっと A さんは A さんとしての居場所をつくれたんだと思います。

掛川：TC、口車に乗せられてなんとか入れて、始まった時どうでした？

C さん：はじめね、やっぱりみんなシーンとしとって、様子見みたいな感じで。A さんとかは特にこの人多分いじめられてまうやろなーとか思っで。ほんで一番初めにボクがマスコットキャラにしたらなあかんわとか思っで。「な、A 爺」ってあだ名つけて(笑) みんなの前で何回も何回も A さん、A さんって言うて、そのまま愛着ついて。A さんもあんな性格なんで、「A 爺 A 爺」言うて、なかなかとっつけられるようにはなつたんかなーとかいう感じで

掛川：うーん

C さん：それ多分ね、ボクの勝手なイメージなんやけど、なんか恩を感じているみたいで。ボクはちょっといじって、まあそういう思いもあつたんやけど、とっつけやすいような、いじめられんようにしたらなあかんわ言う気持ちがあつたんやけど。うん、A さんはなんか変な恩みたいなんがあつて、結構しゃべってくれるような仲。まあ人間関係もうじうじうじうじ、しとう所やから、初めからね。うん、ボクもあんましゃべらんようになって

掛川：え、A さんとですか？

C さん：いや、グループ全体。A さんは結構しゃべってくれる感じで(笑)

C さんは、A さんのことを「自分から音頭とるとかそんな人と違うんですけど、最後の場盛り上げるのに A 爺って言う感じ(?)最後のツッコミ、ツッコまれ役みたいな感じ」とこのときに TC にはなくてはならない人物だった

と評価されていました¹⁵。

掛川：Aさんの人生は聞いていくとほんと波瀾万丈人生ですよ

Cさん：そうやね

掛川：おもしろい言うてええかわからんのですけど

Cさん：イベント会社みたいなんなんかやってみました、みたいな。多分よーさん、だまされとるんやろなー、みたいな。あの性格やから。確かにバブルの時やから、収入もあったんやと思うけど、たぶん半分以上騙されとるんやろなど(笑)こんなこと言うたら悪いんやけど

橋本さん：借金もね

Cさん：おひとよしですよ

掛川：ねー

Cさん：と思いつつ

掛川：最初始まった時は探り合いで、形もできてないから、荒れた状態で

Cさん：そうですね

¹⁵ Dさん：「あそこ（著者注：島根あさひ社会復帰促進センター）は余暇時間っていうのは、自由に部屋から出入りできるんですよ。鍵がかかってないんで。自分でドアを開けて外に出て、みんなが集まる大ホールがあるんですが、そこんところにみんな集まってAグループもBグループも関係なしに会話ができるんですよ。だからそういうところでたまたま、A爺がヒョコヒョコッと寄ってきて、何か話をするって言う感じですね。そこで、A爺が『そっちのグループではこれどうやってる？』って話しかけてくれたんです。同じような内容でグループ同士やってるんですよ。で、自分たちは他のグループのやり方を知らない。うちのグループしか知らないわけじゃないですか。だから『そっちのグループはどんなことやってるの？』とか、向こうも『どんなことやってるの？』とかいろいろ聞いてくるわけですよ。そこでコミュニケーションをとっている状況。だからさっきCさんが言ったように、A爺がいじめられる対象かどうかとかそんなこと全然考えてなかった」（2020年12月27日座談会）

掛川：で、そのなかでもやめることはできなかつたんですよね。TC はじめて、何やこれめんどくさいな、みたいに辞めたいとは思わなかつたんですか？

C さん：そのボクは別にこれでね。あの、その時は自分が変われんねやったらずっと TC でもあのなんていうのかな、あの傍観者でありたい、みたいな、願箋だしたんですよ

掛川：あっ、願箋の段階で？

C さん：そうですね

掛川：傍観者でありたいっていうのを明言して入ったってことですか？

C さん：そうですそうです。TC はサークルで話聞くでしょ。ボク椅子で離れてるからいつも

掛川：あー

C さん：ボクは絶対その輪には入ってるんやけど、輪には入れられへんかった、絶対ちょっと

橋本さん：ふーん

C さん：ま、そういう性格

掛川：TC はじゃあ、なんていうのかな。どういうものだというふうには認めて傍観者でいたいって言うんですか？

C さん：なんか自分は変われるみたいな、なんかね

橋本さん：ふれこみ？

C さん：勝手にボクが思いこんでるところもあるんやけど。自分が変われるところがあるんやったら、ちょっと見てみたいわと

この変われるかもしれないという期待が、その後の C さんを突き動かしていくことになるようです。

3 出所してからの C さん

出所してからの C さんは、A さんと同じように、やっぱり O 先生や P 先生が心の支えみたいになっているところがあつたんじゃないでしょうか。

ふつうの刑務所ではありえないし、島根あさひだからできた、というところもあると思いますが、TC内でのまさに立場を超えた先生方との出会いが、ふたりを変えていったと思うのです。

C さん：なんかあったら、できるだけボク自身も、一緒に参加させてもらって、O 先生やP 先生と一緒にいると、自分の人生どうなるかなてのを見てみたいなーという気持ちもずっとあるから。今まだわからんけど、なんかいつかまた自分がどう変わってんやろと振り返れるときも来るのかなと思ったりもしてるんやけど

橋本さん：楽しみですね

掛川：今、10 年たって変わったなという感覚はあるんですか？ 出てきてから

C さん：でもやっぱり自分なりに充実してないですよ(笑)充実してへんけど、再犯してへんってのがすごいよね

掛川：なんでですか？ すごいじゃないですか。10 年ですよ。しかも薬やし

C さん：うんうん。でも、やっぱり今まで自分がこれしたいって最後までやり遂げたことがないんですよ。何もかもが中途半端でやって。ほんでもうはじめて、大学行こうって決めて。それでもなかなか躊躇しとったんですね。P 先生であつたり、O 先生であつたり、みんなに背中押してもらえてやっと決心ついて。でやっところさ、自分のやりたいと思ったことをはじめてできて

掛川：その大学行くっていうのがやりたかったってことですか？

C さん：そうですね、大学行って、ちゃんと勉強して最後まで何かやり遂げたい。で資格もね

掛川：両方とったんですね、社会福祉士と精神保健福祉士と

C さん：そうですね。うーん、泣きましたね。初めて泣いたうれし泣き

橋本さん：ふーん

C さん：なんか自分でやり遂げて

掛川：結構ね、科目数も多いし、覚えることも多いから、しんどいです

よね

C さん：年々なんか難しくなってるみたいで、何よりもしんどかったんはおやじの介護。これも言いましたっけ、おやじがね、ちょうど死んだんですよ、ちょうど受験の前

橋本さん：ふーん

C さん：ずっとオヤジの介護しながら(笑)

掛川：学校行って、試験勉強して

C さん：そうそう(笑)もうそうせんとおやじの末期はぐっちゃぐちゃですよ。カターンという音がしたなと思ったら、頭打って、リビング血まみれとか。ひっくり返って

掛川：そんなに激しく

橋本さん：在宅でそれを支えてたというか

C さん：そうなんですよ、介護呼んだらええねん言うても介護呼ばへん

橋本さん：受けなかったんですか？ おやじさんが

C さん：いえ、受けれてますよ。要介護4やったからね

掛川：要介護4 やったら結構重たいやないですか

C さん：もう便所が、なんていうん？ 今日は忙しいねんていう日に限って、何か知らんけど、やらかすんやね、何か

掛川：そういうもんなんでしょうね。きつとね

C さん：なんかトラブルできちやうから、も一寝る暇もないみたいな感じで。これも今までの自分がしょうもないことしてきたバチなんかなと思って

掛川：でも最後までじゃ看取るというか、向き合って

C さん：そうですね。そやから、そういう意味でいうたら、自分めっちゃめっちゃ変わったな。ふりかえったらね

掛川：昔の自分やったら最後までお父さんの面倒みるということはなかった？

C さん：ぶち回しはないけれどぶち回す寸前まで、ほんまにもう

C さんは島根あさひでの服役生活があったからこそ、お父さんの介護とも

向き合え、大学への入学や資格取得といった新たな目標も見つけて頑張ることができたとされています。

掛川：結構、CさんにとってO先生やP先生とかって、今でも大きな存在ですか？

Cさん：大きい存在ですね。この人らは一生頭上がらへんし。あの人らに出会ったから、ただ刑務所でなんやかんやするんじゃないし、ボクがやっぱ出所した瞬間に、もうこれもずっと言うてるんやけど、藁をもつかむみたいな思いでおるときに、O先生とかちゃんと受け入れてくれたからね、大学で面接してくれたし

掛川：うーん

Cさん：普通やったら普通の刑務所の職員とかやったら、もう会われへん

掛川：そうですね、普通、会われへんですね

Cさん：もう刑務所のおやっさんやたらなかなか結構なんやかんやで話せるような状況になってっとうから、ボクは結構話せたらええのになーってボクは結構、個人的に思うんやけどね。ちょっとお金かかるけど、刑務所の面接室行って、おやっさんと話とかできて、こんなんやねんあんなんやねん言うて。ま、社会福祉士みたいな役割がおやっさんに一つ増えてまうんやけど。ね、なんかこう記録とって問題やとか資源を探したるような。それはあった方がええと思う。もう孤立しちゃうのは一番あかんからね、ボクも思いますわ

掛川：うーん

Cさん：今でこそね、なんやかんや暮らせてるけど。今の方が、親であったり、友だち関係、まあ友だち関係もだいぶん減ってもうとるけど。ずっとこうやってかかわってくれる人がおるからええんやけど、ひとり孤立しちゃう人なんかやったら情報も入ってこうへんやろしね

掛川：それって、もしO先生が、ずっと島根あさひの職員で、島根あさ

ひに会いに来てもいいよっていう状態と、現実には大学の先生で大学に会いに行ったわけじゃないですか。それって心理的に違ったりします？ 場所が元いた刑務所なのか、全然違う大学っていう全然違う環境じゃないですか

C さん：会う間隔が短くなっちゃうけど、でも一回は行くと思います。
今やったら、距離的にも近いからまだね

掛川：どういう存在ですか？ 今となっては

C さん：うーん

掛川：おかあさんみたいな？

C さん：ですよ。会ってくれいっても、直接は言われへんねんけど、顔を合わすだけでなんか落ち着くんですよ。やっぱなんか変な喩え方するけど、暖炉みたいな感じ。遠いところからずっと温めてくれる。自分自身がこうなっていうかな、いつでも寒かったら近くにいて温まれるしみたいな。でも遠赤外線ですって温かみは感じているみたいな

掛川：そんな大きい存在なんですね

C さん：存在は大きいですね。あの人。今やから、はじめなんやねんこのおばさんと思っとったんやけど。ボク自身があほやから、なに言うとうかわからんかったんですよ。たまに専門用語とか入ってくるから。それで勉強したい気持ちもあったんですよ

C さんは、TC での日々を以下のようにふりかえっておられます。

C さん：ボクもその時は全然成長できてなかったんやけど。自分を社会のなかの一員としてどのように客観視して自分を知ることができとんかっていうのがね、そこまで進んでない人やってんなっていうふうにごく感じてるんですね。何ていうんかな、ほかの刑務所とかやと雑居とかでそういうのを考える時間がないんやね。それで環境が全然整ってへんから、自分を見つめるとか、物事を肯定的に捉える。そこで止まっちゃってる。それでそのまま社会にまた出ってい

ちやう。いろんな教育進んでると思うねんけど、また全然違うねんね、やっぱり

掛川:なるほど。いろんなプログラムを受けるより自分のことを、自分の今までやってきたことをふりかえるっていうのが時を進めるには大事やったということですか？

C さん:そうですね。何が大事なんかってやっぱり毎日なんですよ。毎日その環境におるってことは、やっぱり習慣が大事で。やっぱり他の刑務所とかやったら、週に1回とかでしょ、教育プログラムいうても。全然忘れてまうからね

掛川:なるほど。なるほど

C さん:普通の工場やったらしゃべられへんから、プログラム行ったらいろんな話できるわ、みたいなそのなんていうん？ ちょっとした時間つぶしとかストレス発散みたいな教育になっちゃってるから。全然その自分を見つめる、そこで話したこと、自分が過去どうやっていたいのを話すんやけど、そこでふりかえることは絶対できてない状況、環境なんで。やっぱりそこが全然違うかなと。同じことやっててもね。プログラムを、他とね。その点が大きく違って、やっぱりボク自身がそこでずっとそういう環境が有難いことに、そういう環境にいるのにボクが全然進んでなかった、そこでね。やっぱり出てから一貫してね、P さんとか O 先生、それを通していろんな人とのつながりがあるって自分自身がすごく変わっていった。やっぱり人間てね、変わられへんとかいうけど、変わっていきえるんですよ。ボクやっぱりそれね、幸せやなって思ったんが、やっぱりその社会出てからすごく自分自身が変わったなと。それと比べてなかの人のいうたら、そこで止まってる。そこがすごく大きいなと思いましたね。やっぱり出てからね、じわじわじわじわ、ボクはボディブローっていうふうに表現するんやけど、じわじわじわじわそのなかの教育が結果を残す。人それぞれなんですけど、ボクはそういうふうに今のところはどンドンどンドン変わっていきえるし、変わっていったんやけど、変わってない人もおるかもしれへんし、そこは人それぞれな

んですけど。その人らはなんていうのかな、現実なんですね、虚勢張ってるわけではないんですよ。その人にとっては現実なんですよ。うーんと、なんていうのかな。統合失調症の人が幻覚とか幻聴とか見えるのはその人にとっては事実じゃないですか。それと一緒にその人のなかではそれが虚勢なのかどうなのかわからん状況で事実なんですよ。だからもうその状況をすごく自分で認知、自己知覚というのかな、知っていく段階いうのがすごく大事で。やっぱりその人、人やね。人とかかわり、つながり、すごく大きいなというふうに思った。ほんで人の姿見ながら自分自身が変わっていけるからね。あーって。今、ロールモデルって言うてたと思うんですけど、「あ、あの人ああやってして、こう言った。」困難とか課題、克服していけたやんて。自分自身の対処できるスキルというのがね、やっぱりそういうのが自分で頭の中で考えててもできへんからね。やっぱり目の前で、こうやってああやってこうして、こういうふうな言葉を発するんは、やっぱりね、すごく学ぶことができるんやね。でもやっぱり学校ですわ

掛川:それは、Cさんは出てからそれに気づくことができたっておっしゃってたと思うんですけど、何かきっかけとかあったんですか？ そのボディブローじわじわ効いてきてるなっていつそう思えたんですか？

Cさん:そうやね。ずっと思ってるんやけど、自分自身が今こうやって、毎日なんやけど、いろんな発見があんねんね

掛川:ふーん

Cさん:今までの自分やったらこういう行動してたやろ、でも今行動起こさんとここで留めておくことができる自分がおる、「うわ、すごいな」思ったり

掛川:TCで学べたのってその振り返りの仕方みたいなことですか？ 自分自身のあり方みたいなことをどうやってふりかえるか、みたいな。ふりかえりって簡単にできそうやけど、意外に難しいじゃないですか

Cさん:そうやね

掛川:自分のやってきたことを整理して、新しい物語を作っていく訳なので。自分を理解するための物語、過去の物語を作るためには、その方法をTCで学んだってことですか？

Cさん:としか考えようがないねんね。自分でもうまくわからへんねんけど、なんでこうなったんかがすごく不思議で

掛川:出所後10年とおっしゃっていましたが、10年経ってもまだ、何ていうんですかね、ボディブローが効き続けてるって相当のパンチを受けてますね(笑)

Cさん:と思いますわ(笑)

(2020年12月27日座談会)

この「ボディブロー」という表現がすべてを物語っているように思えてなりません。変わるかもしれないという期待を自分にできるようになって、そのために行動を起こし続けている。TCでの経験の一つひとつが現在の素敵なCさんの原動力になっているのだと思います。

第4章

都市を生きる者たちからの手紙

橋本恵一・有田朗・雷蔵・次元

1 橋本恵一からAさんへ

初めて出会ってもうすぐ7年が経とうとしています。月並みな表現で、Aさんはどう思われるかわかりませんが、僕にとっては「もう」7年でもあるし、「まだ（たった）」7年でもあります。

関わるきっかけになった時も、今でもそうですが、Aさんも知っている通り僕は遅筆で筆無精という、致命的な特性を抱えています。だからこの手紙を書くまでも、ずいぶんと時間がかかっています。それに加え、Aさんとぼくのこれまで過ごした時間や体験に、僕がいかに「向かい合えないか」が、輪をかけて特性を強めています。

Aさんと関わった年月というのは、僕の支援観や対象者の範囲が変わっていった時期と重なっていて、僕にとっては、かけがえのない、新鮮な時期でもありました。

Aさんは僕や、僕が関わる団体に貢献したいという気持ちが強く、僕もそれに精一杯応えようと、もがいていました。当時、僕が大切にしていた支援の方法は、「関われば関わるほど良い結果になる」と信じていたので、夕方、事務所に来るAさんを迎え、20時、21時まで話し込む日々は、自分が信じる関わり方に沿って、しんどさを半分感じる一方、手応えを感じていました。Aさんが話したいだけ聞くことの大切さを感じているからこそできたし、他のスタッフにはこの関わり方を頼れなかった（し、僕がやらずに誰がやると言う若さゆえの気概もありました）ので、Aさんと他のスタッフの間にクッションとして自分の身を置いていました——実際、別のスタッフとのトラブルもありましたね。時にはAさんの思いと行動のズレ

レーキとして、話を聞き、Aさんの希望に沿えるような動きについて協力できることはなんだろうか、と考えていました。Aさんが変わって、O先生にメールを送ったり、パソコンを差し上げて、メールアドレスの作成をしたり、必要な資料を印刷したりと、ふと考えると、僕は写し鏡——Aさんが僕にしていたように——Aさんに貢献していたのかもしれない。

いま思い出すと、また次元さんと話して改めて感じたのは、Aさんの希望と、その時の現実的なイメージが僕の中で結びつかなかった。それは僕の想像力の欠如かもしれないし、Aさんの具体的なイメージの説明が欠如していたかもしれない。話している内容に比してイメージが壮大すぎたのかもしれない。

僕が共生会を離れることになり、Aさんとの関係は、そこから疎遠になる時期を迎えます。言い方はさまざまだけれど、僕はAさんに構うことができなくなり、また必要もなくなったと解釈できるし、翻って、Aさんからみたら、放っておかれたと思っていたのかもしれない。橋本が離職を境に付き合わない方便を得た、と思っていたのかもしれない。

病気と共生しながら、他団体の活動に加わったと伝え聞いた時には、居場所ややりがいを得られたことに「ほっ」としたと同時に、Aさん自身の生きづらさがフラッシュフォワードする感覚もありました。つまり、僕がいた団体で、僕や僕の活動に「仕える」ことで、自身（Aさん）が成功体験のシナリオ通りに進展していると体感し、Aさんの人生にポジティブに働かだろと思う一方で、Aさんが成就するべく努力に対して、立ちほだかる壁が必ず現れるだろうな、というフラッシュフォワードです。避けられない葛藤や苦悩とでもいうのでしょうか。それはAさんに与えられる試練であり、向かう目標が強くあるが故の苦しさのように感じます。

僕が関わった他の出所者が、Aさんと同じマンションに住むようになり、Aさんとよく顔を合わせるようになって、また距離感が縮まりだしました。関わっている団体との関係、自分のあり方、貢献している手応え、その時のAさんは、最初に出会った時のAさんではなく、僕が関わっている出所者の周りで彼の生活を支える協力をしてくれる、支援者そのものでした。

Aさんは僕と出会った頃、連絡をとっていたご家族からの「言いつけ」

と、Aさん自身の回復のために、NPOの人（橋本）の言うことを信じ、ひとつひとつの判断を僕に仰いでいたように思います。P先生を名古屋に呼んだ時だったでしょうか、冗談半分に「橋本さんは僕の父親です。」と話し、確か岐阜で学習会に参加した時にも初めて会う人たちに、そう紹介していたように思います。その時はくすぐったさや、「んなわけないでしょうよ」と感じていましたが、今になって思うと、家族間に起こる特有の、敬愛や憎たらしさ、振る舞いを全肯定することと、鬱陶しさのようなものをAさんに感じていたのかもしれない。2016年のブックレットでAさんについての文章でも書きましたが、きっと「父親」である僕の役割は、Aさんに対して、「聞く」こともさることながら、「動かない」大切さを伝えることであったのかもしれない。再び顔を合わせる機会ができた時に感じた「支援者そのもの」に見えたAさんは、「しなやかさ」を身につけた、鮮やかな回復の途上にある人でした。自身の団体を立ち上げ、構想し、刑務所からの依頼に奔走しながらも、東にアパートを確保し、西に就労機会を獲得するAさんは忙しさの中に、向き合う出所者の姿を、自身の姿と重ね、存在意義を見出している確信の人でした。

徐々に、ボランティアの領域を広げ、居住するアパートの日常的な管理を任されるようになる。様々な背景を持つ人に対して、思い通りに行かないことや、自分の理想と現実のズレが生じ始め、他支援団体のスタッフとぶつかる出来事が起きた。

これまで、Aさんが実現したい状態に向かってある程度の成功体験を積み、次のステップに移ろう（活動領域を広げよう）としているときの「挫け」であり、「困難」に相對して、Aさんの脆弱性が顕在化した。これまで、困難な状況を緩和してきたのは、語り部として夢を語る彼であり、受刑中の苦しみや更生する過程での体験、また家族であり、支援者である共生会（および彼の担当になった職員）であった。時間とともに関係を構築してきたチャネルが増え、自らがコントロール（選択や抑制）する必要性が増えて、同じように思いもよらない現実をまざまざと見せつけられる場面にも出会うこととなったときに、A

さんは自責に駆られるようになった。それは、「俺が手を引けばいい(全か無か)」といった、非現実的で、かつ非生産的な思考である。これまでの得られた信頼を無にし、かつ、否定するような方向で負の循環が始まった。

「傾聴」は対人援助に携わる者として特におおそかになりやすい技術である。話を聞くこと以上に実際の面談やケースワークの方が輝いて見えるからだ。

彼のケースワークのなかで反省点として振り返るとすれば、傾聴するなかで、Aさんの思いを受け止め、きちんと立ち位置を確認しながらの作業が抜けていたということが挙げられる。

聞くだけ聞いて、受け止めるだけ受け止めることを受容したがために、彼は理想の状況へと突っ走り、自分が今どこへ向かい、どこに立っているのかというのを認識する機会が失われてしまったのではないか。

Aさんとの出会いから1年半経った先日、彼のアセスメントを私は『積み木モデル』と(勝手に)名付けた。立方体(積み木)を上積み重ねていくことを「行動」として縦方向の軸がある。積み木1つを土台として上に重ねていくとそれは上部方向(目標)への最短距離の性質を持つが、横(水平)方向の力(軸)が加わるとすぐに倒れてしまう(脆弱性の顕在化)。倒れないためにはどうすればいいかというと、ピラミッドのように、下部には複数(少なくとも一段上の積み木よりも多く)の積み木を平行に「並べ」、その上に一回り小さい段を作っていくことでより強固な集合が作られていく、というモデルだ。

上記のケースに照らし合わせてみると、理想を語る彼の思いを受け止めた上で、一度、積み木を上ではなく、横に並べるのが傾聴する支援者としての役割だったのではないか、と考えさせられた。ホームレス支援や困窮者支援は、不確かさや不意の現実が次々と立ち現れてくる。理想を持つことも大切だが、それ以上に現状に反応し、対応を変化させていくことや、そのストレスにうまく対処、処理していく能力の方が求められる場面が多い。

関係が構築され、積み木を上へと積み彼に対し、聞く（受容）し続けることで、脆弱性に対する備えを不可視化させてしまったのではないかと感じる。ピラミッドの目立たない土台作りを繰り返し、その「確かさ」を検証しながらのケースワークを今後、彼にしていくことで、社会のなかでの「しなやかさ」を身につけていくことが求められている。

そのAさんを見て「贖罪」（Aさん自身が社会にいかにか貢献する）と感ずるか、「更生」（社会がAさんを受け入れる）とみるか、「回復してゆく」プロセスと僕が感ずるか、見方によっていろんな解釈ができると思います。その上で、僕がAさんに出会った「責任」とは、Aさんが僕に対して思い、行動したように、僕がAさんに、またAさんのように受刑を経て社会に戻ってきた人たちに「応答する」ことであると教えてもらいました。

いつの日か、また酒飲みながらあーでもない、こーでもないと思いつきに語り合いたいですね。

2 有田朗からAさんへ

Aさんには、彼の人生の最後の数年間、とても親しくさせてもらった。

しかし、最初の出会いがいつで、どうだったかは良く思い出せない。

おそらく、彼の出所に際して何から何まで支援をされた、ささしまサポートセンターの友人橋本さんから紹介されたのだが、何かの研究会の席だったかもしれないし飲み会だったかもしれない。

私が覚えているのは出会ってしばらくしてからのことで、なぜか熱心に私と「話をしたい」と連絡を下さって、わざわざWからVに、多いときは毎週のように会いに来られて以降のことだ。

会って話をするのは決まって岐阜駅の構内にあるPというお店だった。いつも鉛筆でびっしり書かれたノート、メモ、企画書のようなものを持参されて、私と話したこともすぐノートに書かれることが多くて、少し恥ずかしいくらいだった。

彼の「刑務所を出た人が人生をやり直せるように」という根本的な課題は変わらないが、都度の話題はいろいろだった。

「出所者のための就労支援団体を作りたいがどうすればいいのか」、「何でも屋を合法に作る方法を教えてほしい」、「X先生と一緒に名古屋でイベントを開きたいがどういうのが良いと思うか」、「刑務所から出て悩んでいる後輩？ にどんな話をしたら良いか」、などなど。ときには「一緒に仕事をしようと思っている仲間です」などといろんな方を連れて来られ、一緒にお話をすることもあった。

多分お会いしてしばらくしてからだと思うが、Aさんは私がVの知人友人らと一緒に月に1度か二か月に1度くらい開いている「地域福祉のひろばV」という集まりに、毎回出席してくださるようになった。

「ひろば」は、金曜日の夕方にV駅構内の会議場などを借りて、生活困窮者の支援や地域づくりに関心のあるいろんな職種の方が参加する勉強会、というか交流会だ。

「生活保護を知ろう」とか、「外国人の生活支援を考えてみよう」とか、ほかにもDVのこと、ひきこもり、依存症.....いろんなテーマを毎回変えて、専門家の話を聞いたり、事例をみんなで検討したりする手作りの緩いあつまりだ。

Aさんはこの会合をとっても気に入ってくださり、毎回参加するだけでなく、終わるたびに「次はいつ、何をやるの？」と楽しみにして下さっていた。「出所者支援」をテーマにした回では皆さんに向けて話もして頂いた。

頻繁にお会いして話をするようになってからは、学生時代のことや仕事のこと、家族のことなどもときには話したけれど、全く変わらなかったのは前を向く姿勢、活動への意欲の強さだった。決して暗く沈んだり、投げやりになったりすることがなかった。

癌を患い手術や入院を繰り返しながら凄い勢いで活動されるのを見て、「身体は大丈夫なんですか?」「無理されないように」などと在り来たりの言葉を掛けたけれど、「走り続けないと、時間がなくなるからね」と言って活動を続けられた。

各地を飛び回って、「あたらしい就労支援の取組みをUで始めました。」

「Vでも始めましたよ。」などと毎度報告してくださるので、こちらも「止まったら死ぬって、吉本喜劇ですね。」と茶化しながら話していたが、相当に身体は辛かっただろうと思う。

Pで、一般社団法人かNPO法人を作りたい、という話をお聞きして、名前を決めないといけませんねと話していた際、考えて来られた名前が「トライアゲイン」だった。

Aさんの考えていた多くの活動は、未完成の部分ばかりだということはいくも知っている。しかし「トライアゲイン」を掲げて必死に走った姿は、「人は変わることができる」という強いメッセージを間違いなく多くの人に伝えていただろうと思う。

私もそれを受け取りましたよ。

3 雷蔵からAさんへ

Aさんのご冥福を祈るとともに、僕の主観を踏まえた贈る言葉をここに綴りたいと思います。

もしこの世に冥界が存在するのなら、Aさんはどこに居ますか.....。

もし輪廻転生というものがあるならば、Aさんはどこでどういった新しい暮らしをしていますか.....。

冥界は罪のない人が、成仏するか転生するまでの間を過ごすところとよく言われますが、その罪って何で計られるのだろうか。犯罪・法・刑罰・モラル・社会規範.....？

Aさんは、結果として刑罰を受けたけど、犯罪は犯していないんだよね.....。

Aさん自身がその旅先で出会ったさまざまな人を見て、この人達こんな悪いことしてきたんだって感じているんじゃないでしょうか.....。

日本昔話に出てくる人の良いお爺さんを、そのまま絵にかいたようなAさん自分の生活を圧迫するにもかかわらず他人の尻ぬぐいを断ることをせず生きてきた人生。

自分ではどうすることも出来なくなるまで追い詰められた生活。お人好しが転じて、家族に迷惑をかけたこと.....。

いろいろ僕には話してくれましたね。

人生を振り返り、余命を宣告されたことで「辛かったこと悔しかったこと、後悔したこと」人並以上に思いが強かったね。また、これをどう捉えるはさておき、病気が功を総じて「自分にできること」「素直に支援を受ける」ということが明白になったと思います。

そして、余命を宣告されたことで、「残された時間をどう生きるか」決断できたのだらうね。

日本は福祉途上国だといわれることが多いですが、これは支援を受ける側に問題があるのではないだろうか、とすごく感じました。

というのも、Aさんのお人柄（素直さ）にも起因しますが—「自分に来ること、出来ないこと、こうなりたいからどうしたらよいか、」を明確にして約束は必ず守ったからだと思います。

当然不自由なところ、受けれない支援もあったようですが、支援者とのつながり、人と人とのつながりを通して、Aさんの第二の生活、夢の実現は着々と進んでいたと思えるからです。

支援をする側も、Aさんのように素直で率直なお人柄に、この人のためにしっかりと支援につなげてあげようって気持ちになったんだと思います。

自分の生きた証を残しておきたいと思っても強かったのか、少々先を急ごうとしたところもありましたが、A爺がんばったよね……。僕もすごく勇気をいただきました。

残念なのが、Aさんもかねてから言ってたように、「刑務所に収監されてからでない自分の人生をやり直す決心ができなかったのか」っていうところだよ。

「おぎゃー」と命を授かった、その瞬間から悪い人はいない。

人との関わりや環境、混沌とした社会の中で、なぜ犯罪が起きるのか、そのメカニカルなところと、罪を犯した者の人生のやり直しがなぜこんなに難しいのか犯罪率を下げるべく専門家だけが集まって討論をするのではなく、当事者としっかり向き合って議論できるような場……。やれ更生だ、反省だと、騒ぎ立てるよりもまずは社会復帰ができる社会になって欲しい

ものですね。

上から見下すようにものをいう社会的な地位が高い人、世間で勝ち組といわれる人たちほど、法的に裁かれてないだけで、むしろ法を犯すか犯さないかのギリギリのところで人生を送って来られた人が多い。大企業なんかで訴訟が絶えないのも、そういったことを物語っているのではないのでしょうか。そういった人間たちに、「大きな口を叩くな！」と正直言ってやりたいものですね。

どれだけの犠牲者の上に立っているんだよ！って……。

A さんの強い志と、まだはじまって間のない活動と伺っていますが、しっかりと遺志を引き継いだ人が居ると思います。

A さんの壮絶な人生、振り返ってどうだった？ 晩年の生き方は？

不器用なところもあったけど一生懸命にまっすぐに生きたよね。

最後の最後まで人のためになって……。

「もっとこうやりたい。ああやりたい。」って言ってたけど、もう十分がんばったよ生き様は不器用そのものだったけど、誰よりも輝いて見えたよもう、ゆっくりと休んでいいから。

来世では、A さんの息子はちょっと勘弁だけど…… (笑)

もっと違う、いい出会い方をしたいね

最後に A さんありがとう。心からご冥福をお祈りいたします。

4 次元から A さんへ

A さんとの初対面は普通ではあり得ない環境下での出逢いでした。

一般社会から隔離され、起きている時はもとより寝ている時も 365 日 24 時間全てを管理という名の監視の目が行き届いた、有りとあらゆる行動に制限が課せられ極普通の日常のように過ごさなくてはならないという誰も好き好んで行けるような所などでは到底ない所。というとどんな場所を想像するのでしょうか？ なんて、クイズみたいな出だしでごめんなさい。

正解は(まだやるんかい)、刑務所でした。

しかし、刑務所と云っても従来からある所とは違い、半官半民(P F I 法

式)の島根あさひ社会復帰促進センター(以下あさひと記す)という、どこにも刑務所という文字の無い矯正施設であり、その施設内のTCユニット(従来なら工場という)という場所でAさん(A Jーの方が云いやすいので、以後A Jーにします)と出逢いました。

正直なところ、こんな場所なのだから知り合いなどつくる気など全く無く、己の犯した罪の重さと原因を深く考え、ボタンの掛け違いはどこからだったのか、そして、なにを考えどの様にしていくのかをTC(回復共同体)プログラムに沿ってひとつひとつ絡まった糸を解すように自分自身と真正面から向き合うことだけを日々の日課としているたまたま同じユニットで過ごすだけの関係でした。

そんなある日、プログラムの課題で悩んでいるわたしに、A Jーが「今、どこをやってるの?」と、気さくに話しかけて来たのです。A Jーは1期生、わたしは3期生ですので、A Jーは同じプログラムも3回目な訳です。なので、わたしが悩んでいる事も、A Jーは既に同じように同じ部分で悩んで来たのでしょうか? 答えは違っても、考え方はこの方法で考えたよ? と、自分の経験談を話してくれました。

その後、数回同じような関わりを持ったのですが、親しい間柄ではありませんでした。あくまでも1期生と3期生を越えることは無くわたしは先に一般社会に復帰し、A Jーの事は忘れていました。

わたしは出所後、非営利団体でTCプログラムを活かす活動を行っていました。それは、あさひ以外から社会復帰した人や、生きづらさを抱えている方に、「ここは安全安心な場所で、ここでの話しはここだけの話し」を前提に、自分をさらけ出しても攻撃されないオアシス(サンクチュアリ)という場を皆で作りに上げていく空間でもありました。そんな活動をしている時に、同活動していた弁護士の紹介もあり、某大学の教授から「TCでの経験談を話して欲しい」とのご依頼があり、いきなり100名ぐらいの教場で講話をすることになったのですが、TCユニットでの日々のプログラムのおかげで、人前で話すことになんの躊躇もなく、自身の経歴からTCユニットでの生活やプログラムでなにを得られたかを90分間話し通し、興味本意的な質問にも難なく対応することが出来ました。その後、他の大学やゼ

ミの教授からのご依頼も増え、北は北海道から南は沖縄までと云いたいところですが、大阪・京都より西へは行っていません。

そんなこんなの数年後、フェイスブック上のメールだったとおもいます。ある日突然、A じーから出所してきた旨と「NPOを立ち上げたいから、色々教えて欲しい」そしてあろうことか「NPOを立ち上げた時の理事長になって欲しい」と云われ、驚きと戸惑いを感じながら、わたしの第一声は、「えっ？なんでわたし？」でした。というのも、A じーとそれ程親密な関係をつくっていた訳でもなく、関東圏のわたしより関西圏もしくは、地元の誰かを訪ねる方が好ましいと思うのも当然でしょ。

しかし、A じーの想いは強くしつこい(笑)

根負けして、非営利団体を創るにあたっての注意点やノウハウを伝えはしたものの、理事長の件は断り続けていたのです。が、A じーは聞こえないふりなのか忘れるのか、妙に焦っているとしかみえなかったので、団体を立ち上げる事よりも、何がしたいのか？ どうしてその活動をしたのかをもう一度考えて欲しいと伝えました。何度同じことを云ったかしれません。その考えを実行するのに法人や団体がなぜ必要なのかも考えてもらいました。A じーは、「信用を得たいというが、その信用とやらは、A じーがやりたいことをやる前から得ることって出来るわけないよね？ だったら、まず、己の力だけで信頼を勝ち取ろうよ！法人化はそれから。」それと「A じー一代で築き上げるのではなく、A じーの意思を受け継ぐ者を育てること」「焦るな！」と論じ、有志でのトライアゲインの立ち上げとなりました。

それからの A じーの活躍は目を見張る活躍でしたが、こっちの水は甘いぞ！そっちの水も甘いぞ！とあちこち脱線することも。そして右往左往しながらも W 刑務所からの信頼が徐々に得られてきたころ A じーの病状が悪化し病院を出たり入ったりを繰り返し、志しなかばで、活動を停止せざるおえなくなりました。また、A じーと同行していたスマレ(仮名)さんも独りでは荷も重く無理があります。更に協力者も得られない状況である以上トライアゲインの活動を続けていくのには困難ではないでしょうか。

とある団体が、トライアゲインの名前を引き継いではくれてはいるが、A

じーのように細かな気配りや配慮を期待することは難しいようです。
しかし、A じーの想いを少しでも受け継いでいて欲しいと思います。

あとがき

今回、大阪市立大学先端的都市研究拠点の2020年度「共同利用・共同研究事業」の助成を受けて、本研究は開始されました。

この事業は、「他局部・大学・研究機関と連携することにより本拠点の役割強化に資するもの、かつ領域横断、文理融合、他地域連携、政策提言など学際的にないし実学的志向を持つもの」（研究課題公募要領より）という目的のもと、応募要件として「研究代表者を本学所属研究者以外」とするよう規定されています。またNPO関係者といった実践の方に研究メンバーとして入っていただくというのもユニークなところですね。こうした背景のもと掛川さんからのお声かけは、大阪市大に所属していない私への「白羽の矢」だったわけです。

Aさんとお会いしたこともないなかで、「犯罪（社会）学」を専門としていない私が、ブックレットを編むというのも、どこかピンとがずれているのではと、たいへん心細い気持ちになるのですが、TCを受けた出所者であるAさん・Cさんのその後の人生を描く試みが成功しているかどうかの判断は、読者のみなさんにゆだねるほかありません。

とはいえ、研究者である掛川さんと、実践家の橋本さんが企画された本ブックレットは、Aさんの手記をまとめるという当初の目的を超えて、様々な枝葉が広がっていく要素を含んでいるように思います。

まずまったくといっていいほど刑務所の内実を知らなかった私にとっては、Cさんの語りから刑務所内の日々の様子が非常にリアルに伝わりました。Cさんの語りのなかで、端的に（従来型の）刑務所で役にたったことは「ないね」と断言されていたことに、がく然とするいっぽうで、Cさんが（またAさんも）島根のセンターから非常に多くのことを学ばれていたことに驚き、刑務所とセンターとの違いが鮮明に浮かびあがりました。同時に、こ

の刑務所という施設が社会の中ではたす根源的な機能・役割についてあらためて再考することが、私にとっては課題として残りました。

また私は A さんの手記をまとめさせてもらうなかで、「許し」をテーマにしたわけですが、具体的犯罪をめぐる関係者からの「許し」にとどまらず、大きな意味での「許し」、すなわち出所後の世界である「社会」の側が「許し」をどのように用意していくのか、ということが私のなかで新たな問いとして残ることになりました。これは上記の「犯罪者を刑務所という施設に入れる」という根源的な意味を、裏返して考えることにあたるといえます。

犯罪・事件をめぐる報道やインターネットニュースのいわゆるコメント欄など少し眺めるだけでも、この社会では道徳ではなくリスクへの不安による連帯が現実のものとなっていることがリアルに体感できますし、社会に装置としての「許し」を設ける以前に、そのような包摂の耐久性が社会にあるかどうかとも疑わしくなります。

とはいえ私自身も、TCを経験された A さんの手記をまとめ終えた今でもなお、正直に申し上げて、この課題や問いの大きさにたじろぐしかありません。ほかでもない、A さんがあれだけ「許し」への焦りをにじませていたのですから。

2021 年 1 月 24 日
山北 輝裕

先端的都市研究拠点「共同利用・共同研究拠点」事業について

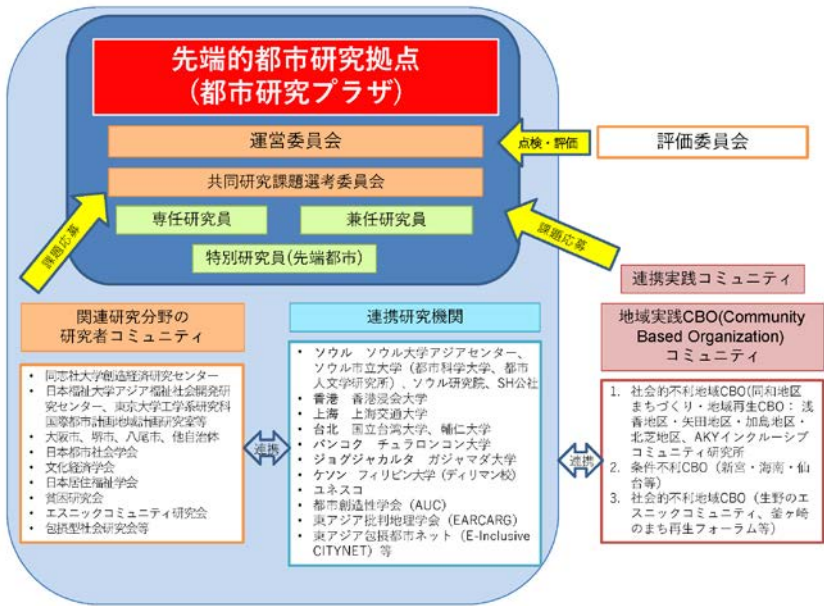
共同利用・共同研究拠点事業は、大学等から研究者が集まり、共同利用・共同研究を行う「全国共同利用」のシステムです。2020年度に文部科学省に拠点として認定されていた研究機関は、国立大学 67、公立大学 9、私立大学 18、ネットワーク 6 の合計 100 箇所 に及びます。

大阪市立大学は、建学の精神「大学は都市とともにあり、都市は大学とともにある」を受け継ぎ、「都市を学問創造の場としてとらえ、都市の諸問題に英知を結集して正面から取り組み、教育及び研究の成果を都市と市民に還元し、地域社会及び国際社会の発展に寄与してきました。市民のみなさんとともに、都市の文化、経済、産業、医療などの諸機能の向上を図り、真の豊かさの実現をめざす」ことを理念に掲げ、都市や地域の研究に対する総合的かつ学際的な都市研究の領域を領導してきました。教育の基本方針も「都市・大阪を背景とした市民の大学という理念に立脚」するとしています。

本学の建学精神を基礎とする都市研究プラザ（以下、URP）は、グローバル COE「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」（2007年度～2011年度）を推進し、独自に築いた海外センター・海外オフィスを始めとする国際的な研究者コミュニティのネットワークとの協力の下、文化創造と社会的包摂、アートによる災害復興等、学際的かつ広範囲の分野に渡る研究実績を重ねてきました。これまでの国際的な地域連携型学知と実践知のプラットフォームによる研究活動の蓄積によって育まれた、国内外の包摂型現場ネットワーク、幅広い域外・越境ネットワークの活用による共同研究活動を最大限活かすべく、2014年度により「共同利用・共同研究拠点」として認定されています。

本事業では、これまで蓄積してきた研究や学術資源を、さらに地域や一般社会、かつ連携研究機関と共有・協力していくプロセスを重視し、各連携研究機関が積み上げてきた都市研究における先端的取り組みをスケールアップしていくための連携型拠点として整備を図っていきます。これらの取り組みを通じ、世界及びアジアの都市をフィールドに据え、文化創造と社会包摂に資する先端的都市論を構築する共同研究と研究拠点の形成を行う中で、

「21世紀型のレジリエント（復元力に富んだ）都市」のあるべき理念モデルと実践モデルを彫琢していくことが期待されています。



2020年度公募型共同研究採択課題

代表者	研究テーマ
網中 孝幸 (EAICN/ジャパン)	東アジアインクルーシブ都市ネットワークの構築に向けた都市間の経験交流
森口 由佳子 (関西福祉科学大学)	地域共同のまちづくりによる社会的不利地域の再生に向けたアクションリサーチ
日高 真吾 (国立民族学博物館)	被災地芸能の文化的脈絡の拡張—虎舞(岩手県)を事例として
川崎 修良 (長崎県立大学)	創造的都市再生の試みにおける学生の包摂手法の研究—京都における芸術文化の創造性を活かした市民主導のまちづくりプロジェクトを題材に
山北 輝裕 (日本大学)	現代日本における矯正教育の批判的検討—都市を生きるその後の人生
陸 麗君 (福岡県立大学)	感染症パンデミック危機状況下における外国人の居住と経済活動の現状と課題
ヨハネス キーナー (埼玉大学)	サービスハブにおける危機とイノベーションのダイナミクスに関する国際比較研究

■著者紹介（執筆順）

- 掛川 直之 立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員
- 山北 輝裕 日本大学文理学部教授
- 橋本 恵一 NPO 法人ささしまサポートセンター事務局次長
- 有田 朗 一般社団法人アルファリンク代表理事
- 雷 蔵 島根あさひ社会復帰促進センターTC1 期生
- 次 元 島根あさひ社会復帰促進センターTC3 期生

URP 先端的都市研究シリーズ 23

都市を生きるその後の人生

—ターニングポイントとしての治療共同体

2021年3月15日 初版第1刷発行

編者 山北輝裕・掛川直之

発行者 大阪市立大学都市研究プラザ

〒558-8585

大阪市住吉区杉本 3-3-138

電話 06(6605)2071 FAX 06(6605)2069

ISBN 978-4-904010-38-9

©2021 T. Yamakita & N. Kakegawa

Printed in Japan